

愛 知 県

東海市カブト山遺跡

第 二 次 調 査 報 告

1 9 7 4

東 海 市 教 育 委 員 会

愛 知 県

東海市カブト山遺跡

第二次調査報告

1974

東海市教育委員会

序

私の子供の頃、このカブト山一帯は一軒の家もなく、うつそうとした樹木におおわれ、昼なお淋しい処であつたように記憶しています。また第2次大戦中は付近に高射砲陣地がつくられ、一般の者は近づくことも出来ない状態でありました。それが近年、急激な発展と土地開発により近くには鉄筋の団地が出来、新興住宅地に変容するにいたり、知多半島で最も古いカブト山古墳もいつの間にか消滅してしまいました。たまたまこの付近を調査していた池田陸介氏が、土器の破片の散乱するのを発見し、昨年度に第1次調査をおこない住居跡があることが確認され、本年度ふたたび本格的に杉崎章氏をはじめ多くの方々のご協力によつて、広範囲に発掘調査をおこなつたところ、数多くの住居跡が発見されましたことは、文化財保護行政の上からみても誠に意義深いことと存じます。アユチ瀉を眼下に見おろして生活していたカブト山住居の人々も溶鉱炉の火と、大きく発展した東海市の姿を眺めて驚異の眼をみはつていることであらうでしょう。

ちようどこの発刊と時を同じくして市立の郷土資料館の完成をみましたので、貴重な資料を展示し、またこの報告書によつて東海市の歴史をさらに深く掘りさげることができると存じます。夏の炎天下に汗を流して発掘に従事された方々に深甚の謝意を表するとともに、この遺跡を永く保存するように努力致したいと念じてやみません。

昭和49年2月

東海市教育委員会

教育長 築 波 善 夫

例 言

1. この報告書は、東海市教育委員会が昭和48年8月に実施した東海市名和町カブト山遺跡の第二次調査の報告である。
2. カブト遺跡は、東海市名和町の欠下から石田におよぶ古代集落址である。遺跡の近くにはカブト山古墳といて、明治13年の発掘につづき、ここ数年間の採土工事により、かつての墳丘の面が完全に空間に浮いてしまったが、北方の数十 m のところを古式古墳があり、尾張地方において出土遺物のわかる数少前期古墳の一つとして知られている。カブト山遺跡はカブト山古墳に関連した集落址として注目されている。
3. カブト山遺跡については、第一次調査の直後に速報版として、タイプオフセット印刷の仮報告を刊行した。本報告書は、第二次調査の報告であるとともに、調査の総括報告書である。したがって内容に第一次調査の仮報告と重複する面もあるが、了解をねがいたいところである。
4. 執筆の分担としては、次のようである。（敬称略）

第一章 石川 玉紀（東海市上野中学校教諭）

第二章 1. 杉 崎 章（美浜町布土小学校長）

2. 三渡俊一郎（名古屋考古学会員）

3. 池田 陸介（名古屋市大江中学校教諭）

第三章 磯部 幸男（南知多町豊丘小学校教頭）

第四章 三渡俊一郎（前掲）

池田 陸介（前掲）

第五章 立 松 宏（半田市乙川中学校教務主任）

大 下 武（愛知県瑞陵高等学校教諭）

第六章 長谷川昭二（東海市緑陽小学校校務主任）

第七章 杉 崎 章（前掲）

付載一 宮川 芳照（江南市布袋小学校教諭）

付載二 杉 崎 章（前掲）

表紙の題字は、東海市文化財調査委員で上野公民館長の浅井啓吉氏に揮毫をうけた。

東 海 市 教 育 委 員 会

目 次

| | | |
|-------|------------------|----|
| 第 一 章 | 位置と地形・地質 | 1 |
| 第 二 章 | 第二次調査の経過 | 3 |
| 1. | 遺跡の由来 | |
| 2. | 試掘の記録 | |
| 3. | 調査の日誌 | |
| 第 三 章 | 第 1 区の調査 | 9 |
| 1. | 発掘の経過 | |
| 2. | 第 3 号住居址 | |
| 3. | 小 結 | |
| 第 四 章 | 第 2 区の調査 | 14 |
| 1. | 発掘の経過 | |
| 2. | 第 4 号住居址 | |
| 3. | 第 5 号住居址 | |
| 4. | 第 6 号住居址 | |
| 5. | 小 結 | |
| 第 五 章 | 第 3 区の調査 | 21 |
| 1. | 第 3 区の住居址 | |
| | (1) 第 7 号住居址 | |
| | (2) 第 8 号住居址 | |
| | (3) 第 9 号住居址 | |
| 2. | 第 3 区の出土遺物 | |
| 3. | 小 結 | |
| 第 六 章 | 西方柱穴群の調査 | 25 |
| 1. | 発掘の経過 | |
| 2. | 遺 構 | |
| 3. | 出土遺物 | |
| 4. | 小 結 | |
| 第 七 章 | 総 括 | 28 |
| 付 載 一 | 第一次調査の住居址 | 31 |
| 1. | 第 1 号住居址 | |
| 2. | 第 2 号住居址 | |
| 付 載 二 | 天白川南岸段丘の遺跡 | 35 |

挿 図 目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| 1. 東海市カブト山遺跡付近の地形図 | 1 |
| 2. カブト山遺跡住居址分布図 | 4 |
| 3. 第1区遺構(第3号住居址)とdトレンチ断面図 | 11 |
| 4. 第1区出土の遺物 | 12 |
| 5. 第2区遺構(第4・第5・第6号住居址)とeトレンチ断面図 | 15 |
| 6. 第6号住居址実測図 | 17 |
| 7. 第2区出土の遺物 | 18 |
| 8. 第3区遺構(第7・第8・第9号住居址) | 21 |
| 9. 第7号住居址実測図 | 22 |
| 10. 第3区出土の遺物 | 23 |
| 11. 西方柱穴群実測図 | 25 |
| 12. 西方柱穴群出土の遺物 | 27 |
| 13. 第1号住居址実測図 | 31 |
| 14. 第1号住居址出土の遺物 | 32 |
| 15. 第2号住居址実測図 | 33 |
| 16. 第2号住居址出土の遺物 | 34 |
| 17. 天白川南岸の地形と原始・古代遺跡 | 35 |
| 18. カブト山古墳出土の遺物(明治14年模写) | 37 |
| 19. 三ツ屋古墳群付近の地形実測図 | 39 |
| 20. 三ツ屋第1号墳出土の須恵器 | 40 |

図 版 目 次

- 第 1 1. カブト山古墳の遠望（昭和45年2月）
2. カブト山遺跡の調査状況
3. 第2号住居址の全景
- 第 2 1. 第3号住居址の柱穴群
2. 第3号住居址の遺物出土状況
- 第 3 1. 第2調査区（手前より第6・第5・第4号住居址）
2. 第6号住居址の入口遺構
- 第 4 1. 第3調査区（手前は第7号住居址）
2. 第7号住居址の全景
- 第 5 1. 第7号住居址の遺物出土状況
2. 第8号住居址の炉址
- 第 6 上. 石製紡錘車出土状況
中. 甗の出土状況（西方柱穴群）
下. 甗（上掲図版）の底部
- 第 7 上. カブト山古墳の石製模造品
中・下. 三ツ屋第1号墳出土の須恵器
- 第 8 上. 三ツ屋第1号墳出土の遺物
中・下. 大高廃寺出土の蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦
-

付 表 目 次

| | |
|------------------|----|
| 第3号住居址ピット寸法 | 13 |
| 第5号住居址ピット寸法 | 20 |
| 第6号住居址ピット寸法 | 20 |
| 第2区内出土の区別遺物 | 20 |
| 第7号住居址ピット寸法 | 22 |
| 西方ピット群ピット寸法 | 25 |
| 西方ピット群出土の区別遺物量 | 26 |
| カブト山遺跡住居址の規模と編年表 | 29 |

つてみると、北西方は断崖となつて沖積地に接し、伊勢湾、天白川に面している。この断崖はかつての海岸線が隆起した海岸段丘が海流や波浪のためはげしい侵蝕をうけて、形成された海蝕崖と考えられる。ここから伊勢湾をみおろすと、かつては眼下に海岸がひろびろとひろがつていて、遠く鈴鹿連峰を望む景勝の地で、古代アユチ潟の南縁にあたるところであつた。しかし、現在そこにみおろす景観は名古屋南部臨海工業地帯の重化学工業の工場群であり、むかしのおもかげはどこにもみられない。

知多半島北部の地形・地質は尾張丘陵の延長部ということができ、第三紀新層の鮮新世にあたる常滑層群がその主体をなしている。丘陵の標高は高いところで60m程度、各所に悪地状の地形がみられる。この悪地の地形は、その崩壊しやすい性質のために常滑層群の丘の頂上に侵蝕をまぬがれてのこつている加木屋層の個所においてとくに目立つている。

知多丘陵は尾張丘陵に比較して変位が著しく、半島北部の分水界付近には半島と同一方向の軸をもつ背斜状の地質構造がみられる。すなわち、南北に走る著しい2本の地質構造線がある。一つは国鉄東海道線の走る名古屋市緑区大高町から大府市へとつづく大高一府ラインとよばれるものであり、もう一つは伊勢湾の奥の名和町から荒尾町をとおり、阿久比谷へとつづく名和一加木屋ラインとよばれるものである。これにそつた西側の地層には礫層が豊富でみな一様に30度~60度の急傾斜をなし、東・西両構造線の北から南まで過激な地殻変動のあとを物語つている。

常滑層群は下部の鬼崎層と上部の三和層に大別される。常滑層群について、大府町共和の西方の末広付近の調査では、その厚さは、514mあり、上部100m未満には三和層が分布すると考えられる。鬼崎層の最下部は層厚50m内外のチャート礫の多い礫岩層である。その上にシルト層の多い夾炭層があり、その中には厚さ70cm以下の亜炭層および種々の厚さをもつた凝灰岩層が、それぞれ数枚はさまれている。

知多半島基部においては、この鬼崎層をおおつて60~200mの地層が分布している。これが三和層である。本層は海拔40m~50mまでの波状の丘陵地に発達し、多くは水平に近い状態で横たわり、10度内外北または、東へ傾斜している。三和層はシルト岩が割合に少なく、黄褐色の細粒礫岩や小礫まじりの黄色砂岩が多い。礫は直径3cm以下のチャートの礫がもつとも多く、直径5cm以下の白色流紋岩質のものがしばしばまじつている。シルト岩は風化すると薄桃色をおびることが多い。

この丘陵の下にひろがる海岸低地および天白川や大田川にそつて、沖積平野が発達するほか、丘陵地内においても多くの樹枝状の小谷に沖積地がみられる。これらは全体的によく耕されている。

東海市の都市化は戦後とくにここ十数年に著しく進み、名古屋の都市化地域となつた。この地域的変容に決定的役割を果たしたのは、埋立て地に大規模に建設された名古屋南部臨海工業地帯の造成であり、これを契機に住宅化が著しく進んだのである。住宅地として開発されたのは、この地域の鉄道が沿岸低地と丘陵の侵蝕谷を通るため、沿線背後の丘陵地であつた。そのため丘陵地の変貌がもつとも著しい。

工業地帯の建設がすすむにつれて、大気汚染などの公害が大きな問題になりつつある。

また、この地域はもともと名古屋市に隣接する近郊農業地域であり、トマト・たまねぎ・落などの野菜や温室園芸、みかん、ぶどうなどの果樹と地先海面での海苔の養殖で知られていた。しかし、埋立地の造成で、まずのりが消え、野菜や果樹も都市化の進行によつて衰退しつつあるのが現状である。

(石川 玉紀)

第二章 調査の経過

1. 遺跡の由来

知多半島の基部で伊勢湾の奥にあたり、東海市と名古屋市の境界に天白川が流れている。川の南は東海市名和町であるが、今では名古屋市の緑区といて、かつて知多郡大高町とか愛知郡鳴海町とよばれた地域についている。この付近の低地は万葉集その他に古くからアユチ潟として知られている。

その古代アユチ潟の南縁を区切るような形で、高さ30m程度の丘陵がつづいているが、その西南の突端の欠下支丘にカプト山古墳が位置しており、小さい谷をへだてた東の三ツ屋第1・第2・第3の古墳、さらに斉山古墳につづいていて、大きく名和古墳群として総称されている。丘陵は東につづいて名古屋市大高町の地内にむかうと、延喜式内の氷上姉子神社があり、ヤマトタケル伝説にかざられる氷上邑である。丘の名も氷上山とよばれており、ヤマトタケルが滞在の夜、砂をかむ海波の音に寝覚めになったという寝覚の里の碑もある。斉山古墳のある丘陵の付近からは数か所の小貝塚が発見され、とくに山頂の斉善稲荷の境内のものは縄文文化の晩期終末に編年され、弥生時代の中期から後期の遺物もみられている。

何の特徴もない低い丘であるが、まさに古代史の宝庫といえる地域であり、とりわけカプト山古墳は明治13年1月に発見と同時に掘りかえされて、尾張地方で知られている数少ない前期古墳の中でも出土品の判明している遺跡である。粘土床の中に朱の層がはさまり、三神三獣鏡・六神鏡・捩形紋鏡など4面の鏡や、石くしろ9・管玉147をはじめ、石製の埴や器台・合子など模造品が発見されている。カプト山古墳の立地は、地籍の上では知多半島であるものの、古墳の文化圏としては名古屋南部を中心として把握されるもので、大和朝廷の勢力が大和を統一したのち、東国の征服にのりだすにあたり、尾張北部の犬山や春日井の丘陵部を拠点として、名古屋台地から海岸地方へおよぶ勢力伸張の一時期を物語っている最初の橋頭保である。

カプト山古墳は昭和5年に小栗鉄次郎氏によって愛知県史跡名勝天然記念物調査報告第八に所収された「上野町名和に於ける古墳」に欠下（カプト山）古墳として紹介された。報告書に記載された内容を検討してみると、明治13年に発見された粘土床とならんで、さらに1基の粘土床が存在したとする余地もあり、昭和33年の冬のころ地元の研究者である加古篤生・森本良三の両氏に協力をうけ現地付近の踏査をしたことがある。現地はカシヤツバキ・カクレミノなどの雑木林となつていて、その最高部に小祠がまつられていたのであるが、古代地形を復元してみると最も高かつた地点は、そのころすでに畑になつていた東側の前面15mほどの付近であり、カプト山古墳の小祠は地主による土取りののち、崖つぶちに帯状の土塁のようにのこされていた地点に、場所を移して建てられたものと想定をした。しかしまだ北の方の東海市名和から大高町へいく道路の方角からながめた場合は、古墳の景観が保持されていたのである。ところが名古屋南部臨海工業地帯の造成を軸とした地域の変革の中で、さらに10m近くも丘の基盤がさげられ、ここ数年の間に、崖つぶちの自然景観とともに完全に破壊されてしまったのである。

カプト山遺跡の発見はその直後である。

丘陵の土取りが再びはじめられたのである。かつてのカプト山古墳のあつた地点から50mも南へいった付近である。昭和47年の9月下旬のこと、たまたま遺跡の近くを散策していた池田陸介氏がパワーシャベルですくわれた土砂の中から累々とした土師器片をみつけた。池田氏の誠意が関係者をうごかし、緊急調査ではあつたが昭和47年の年末にかけて、杉崎が学術担当者となり、三渡

俊一郎・池田陸介・長谷川昭二・石川玉紀・宮川芳照の各位の協力をえて発掘調査を実施した。

発掘の成果は、東海市カプト山遺跡の第一次調査報告として、昭和48年6月に速報したように第1・第2の住居址を検出した。この結果、さらに遺構の確認と遺跡地の保存をはかるため国庫補助金の交付をうけ実施したものがここに報告するカプト山の第二次調査である。

(杉崎 章)

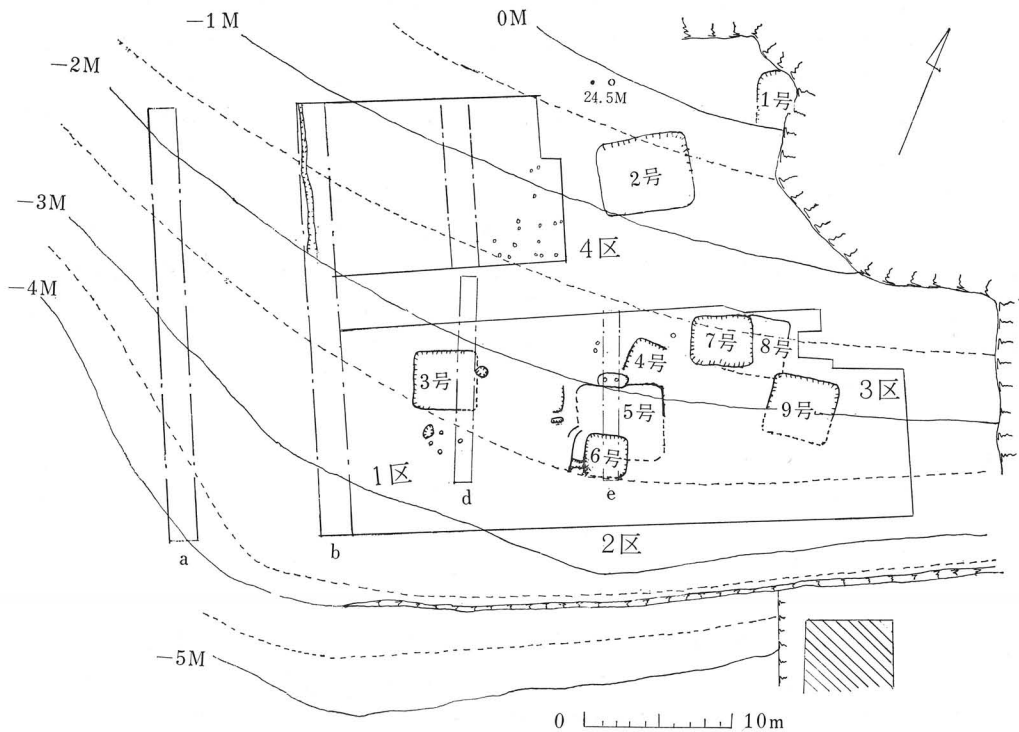
2. 調査の記録

調査は昭和48年8月5日より30日にかけて実施した。第1段階として設けたトレンチは挿図第2にしめすa-eの各トレンチで、ほぼ南北方向に30m、幅2mの規模のものである。日を追つて調査の経過をしめすと下記のとおりである。

8月5日 アルバイト高校生拾数名が社会教育課職員（以下市職員と略す）指導のもとに、遺跡のなかば以上にわたつておい茂るススキの刈りとりにいどむ。草刈機の調子が悪く仕事は難行する。この日テント張りを終了する。一方、三渡と長谷川昭二はトレンチ位置と等高線測量点の杭打ちに従事する。

8月6日 アルバイトと人夫にて残つたススキを刈りあげ、除草の運搬をなし本発掘に備える。三渡・長谷川は昨日の杭打作業を継続し、市農務係長和賀氏と水谷和喜は等高線の測量作業を終了する。

8月7日 本日より試掘作業を開始。



挿図第2 カプト山遺跡住居址分布図

a トレンチ 北端で柱穴（径約30cm）2個検出。土師器片を少数採集。トレンチ断面は灰色の表土層（15cm前後）の下に小石を多く含む落畑の耕土である灰褐色の粘りけのある土層が堆積し、北方は厚く（25cm）南方にうすくなり消えている。その下は地山で北高南低の小石を多く混える褐色土である。

b トレンチ 土師器片はa トレンチよりやや多い。トレンチのほぼ中心線に平行な主軸をもつ南北方向に浅い溝が地山に掘られている。南端で幅55cm、深さ13cm、北方へ次第にせまく浅い。北端では幅30cm以下となる。溝の底は北に高く南に低い。

トレンチの層序は表土層（10cm内外）の下にa トレンチとおなじ灰褐色土層（10cm内外）が地山上に堆積している。調査終了。

c トレンチ 表土層を除去し、土師器・須恵器片を少量採集。

d トレンチ 表土層を除去、土器少量。

8月8日 c、d、e トレンチ調査。

c トレンチ 土器片の群在する個所あり、層序はa、b トレンチと同じ表土層（20cm内外）の下に小石を多く含む灰褐色土層（10～15cm）があって遺物含有層である。地山面は北より南にゆるやかに傾斜している。調査終了。

d トレンチ 北半分を地山面まで調査。トレンチ北端にピット、中央部に近く土器片の集積する落込み個所を発見。弥生式土器・土師器・須恵器など採集。

e トレンチ トレンチの北半分で住居址の北壁とみられる段部1か所を検出。

8月9日 d、e トレンチ調査。

d トレンチ 前日発見の落込み部分は径1m、深さ40cmばかりの大形ピットと判明。本ピット内部の黒褐色土中からは弥生式土器・土師器・須恵器を採集。とくに土師質の坏身は注目をひく。北部に長径40cmのピット、南部にも径20cmのピット発見。トレンチ南半部下層からの土器の出土量多し。土師器、須恵器を採集。

e トレンチ 南半部の表土層下方の第二層（灰褐色土層）からは土師器・須恵器、その下の淡褐色土層からは土師器を採集。

8月10日 d、e トレンチ調査 d トレンチ調査終了。

トレンチ断面の層序については第3章第1区でのべるごとくである。

e トレンチ 北半部で径15cmの小ピット、南半部で住居址の北壁とみられる段部を地山面に検出する。トレンチ断面にみられる層序については後記するため説明を省いた。

8月11日

a～d トレンチの平面および断面測図。

8月12日

e トレンチの平面および断面測図。

トレンチ調査の結果をまとめると、落畑のひろがる高い区域は土器の出土量は僅少で、b トレンチ内にみられる北から南に下る溝状遺構が住居区域の西限を画するものと考えられ、つぎにスキの繁茂していた低い区域では、d、e トレンチともに遺構の一部が検出され、土器の出土量も多かったため、ここは住居址区域であることが推定された。当初全域に遺構の存在が考えられたが第一段階の調査の結果西部15～20mの範囲は遺構の可能性がないのでb トレンチ以東の調査に主力をそそぐことにした。

8月20日（月）カブト山西の緑陽小学校の前の道やカブト山南の八幡社からの坂道を常滑高校・

大府高校の生徒が、カブト山の遺跡めざして続々と集ってくる。1号テント内で、杉崎調査主任から第1区はdトレンチを中心として磯部幸男班、第2区はeトレンチ付近の三渡俊一郎班、第3区は新しくfトレンチを設定して立松宏班さらに第2号住居址の東南にgトレンチを設定して仮に加藤岩蔵班、それに補助員の紹介が下記のようにおこなわれる。

総括 杉崎 章

第1区 磯部 幸男 片山 正樹・山下 勝年・池田 政治

第2区 三渡俊一郎 池田 陸介・水谷 和喜

第3区 立松 宏 大下 武・木田 文夫・北川 定務

第4区 加藤 岩蔵 長谷川昭二・中山 善夫・都築 義秀

高校生・中学生も各班に分かれ、各地区ごとに発掘調査の作業に入る。石岡係長・吉田主事の指導で、2号・3号のテント張りがおこなわれる。東海市の磯部組から貸りたベルトコンベアが、けたたましくモーターの音をたて、土を崖下と、南の畔近くへ落としていく。一輪車・備中鍬・シャベルの道具が荻田主事の手で運ばれてくる。坂兼正氏の好意で水道の水がフルに使用できることは作業をやり易くしてくれた。g地区から早くも甕の底の破片の一群、把手の痕のみられるこしきの破片などが出土する。fトレンチの最北部からは住居址の壁らしい部分が見つかり、その壁の方向確認のため東西へトレンチをひろげる作業が進められる。第1区も試掘トレンチの北を東西にひろげ、その東の部分に住居址の壁のコーナーが発見された。

8月21日(火)正午の気温は33°C、湿度は57、中高校生の作業着が汗で濡れている。モーターも快調なうなりを上げ、土を流すように運んでいる。第2区は、試掘の部分を中心に東西へ2m、10mの幅でひろげ、東トレンチの北部は地山の層をみせている。灰褐色の第2層からは須恵器・土師器の破片が多量に出土する。昼頃、スモッグ注意報がだされる。空一面がどんより曇つたようになつてはいるが夏の陽ざしは強く、時々谷をのぼる風は肌に心地よい。本日からハソリの大釜にもプロパンが点火されうまいお茶が用意された。坂兼正氏宅の大冷蔵庫からはバケツの氷が佐藤えり子・蟹江真由美主事の手により運ばれ、50名からの作業員の口を冷やしてくれる。

8月22日(火)第3区は今次発掘で最初に住居址の存在を確認した地区である。住居址の壁にそつて、その下に溝の掘り込みもみられ、作業は順調に進められる。東側にひろげられたトレンチから、固い焼土の炉址を思わせる部分があられる。その内側には炭や灰の層がみられた。第2区も南方に、第6号住居址の壁と溝の掘り込みをみせるコーナーの部分が見つかる。これを南と西へ追う作業が進められる。各区とも住居址や、関連した遺構の発見で、発掘の場所をひろげる作業量はきつくなる。そのためか頑丈な唐鍬の柄がつけ根の部分から折れたり、シャベルの柄に、ひびが入つたりしたものがテントの近辺にころがつている。

8月23日(水)朝から黒い雲が低くたれ、時おり雲の一群が北東の空へ走るのがみられる。昼すぎ名古屋や岐阜の高校生が見学にくる。杉崎主任よりカブト山と大和政権との関係を聞き、感銘深く身をのりだしていた。第1区からは一片だけであるが縄文晩期の亀が丘式の精製土器がでる。またgトレンチからは、石製紡錘車や大形の土錘が出土する。すでにgトレンチからは、完形品に近いこしきを見つけており、大形甕の底部の出土などから、第2号住居址の付属建造物ではという声もある。

8月24日(木)雨は小降りではあるが、たえず降ってくる。第3区は住居址のコーナーの部分と思われる壁面はでているが、それに伴う溝が見つけない。ほかの区も同じく礫の多い地層であること、地山の層と床面の区別がつきにくいことなどから、ピットをみつげるために、床面を掘りすぎてしまう。1時30分ころ、愛知県の文化財専門委員である名古屋大学の澄田正一・井関弘太郎の両先生が、調査のアドバイスのためにこられる。各区ごとに発掘状況の説明をする。あと井関先生

はカブト山周辺を観察して廻られる。雨が強くなつたのでテントに入り、カブト山周辺の遺跡や昔あつた湧水の場所などを説明する。井関先生からこのカブト山の地層は湧水にはよい条件をそなえていること。飲料水を確保するには好都合の場所であり、マツ、クス、カシその他雑木林がそだつにはよい環境である。遺跡の保存とともに緑の環境保全のためにも、氷上の山からカブト山につづく地域一帯を保存するようにと強調される。第一次調査のおりの澄田先生の指摘と全くおなじご教示である。雨が降りやまないので3時ごろ作業を中止し解散する。第3区の第7号住居址がこの日全貌をあらわす。その大きさは東西に4.2m南北に3.2mあり、北側に畳2枚分ぐらいにひろがつた炭・灰の層は厚さ4cmほどで、火事にあつたことを思わせる量である。第1区は試掘の時の大ピットを南のすみに、ほぼ1間位の間隔で支柱穴が四本みられ、それを囲むように30cmも離れずに3~5本の柱穴がかたまつてでている。住居址の壁が見あたらないので平地式ではないかあるいは高床式のものかと話されている。第2区は第6号住居址の床面が全部でてきた。南の壁と溝をみつけるために南へ作業をひろげる。

8月25日(土)この日も小雨が降つたりやんだり、作業開始後まもなく地元の小島正雄市議会議員が来訪。遺跡の出土状況を早く市長に見てもらわねばと、急いで連絡してくるといつて帰られる。第2区の第6号住居址の南側は検討の結果、破壊されていることがわかつた。そのご、床面を完全にだしてみると、柱穴4と炉址・貯蔵穴をみつける。第3区の第7号住居址は、床面の清掃も終える。南壁にそう溝状掘り込みに3個の土器片がみられ、これが住居址の年代決定に欠くことのできない証拠になる。ここはすでに測図作成にかかり、第9号住居址の規模確認の作業もすすめられている。

8月26日(日)朝からきょうも降つたりやんだりの天気だつたが、昼食後やつと雲間に青空があらわれる。日曜日のためか見学者多く、遠く加木屋から2組の親子、新日鉄名和団地の人々、姥が懐から幾組かの家族づれがこられ、市民対象の現地説明会をもてばよかつたと反省をする。10時ごろ久永春男先生が指導にこられる。各区ごとに指導をうける。第2区の結果を概略すると、1.全体に床面を削りすぎている。2.斜面になつた床面はない。床面の低い方には必ず土盛りがしてあるはずだから、層序の断面を丹念に調べてみる。3.貯蔵穴の掘り方は、甕がどう置かれたか、木わくが、どう並べられていたか、有機質のものはないかと慎重に掘り進めること。4.雨で土の見きわめができにくい時は、発掘はやめた方がよい。5.床面が廃棄されたあと、小礫のころがり具合を、層序の断面から観察すること。6.地山の壁だけでなく、盛土のものもあること。等々、貴重なご指摘をいただく。

8月27日(月)数日つづいた小雨もようやく晴れ、夏の空にもどる。第1区は測量終了、第2・第3区も測図に入る。第6号住居址に出入口のあることを西側に発見する。その内側周溝にそつて7~10cm大の礫が数個、土のくずれを防ぐように置かれている。中央部は土が高く盛られ、外側からの吹き込みを防ぐように作られている。第3区は第7号住居址の測図を完成し、第9号住居址の測図作成に入る。Gトレンチは残念ながら住居址の確認ができず、平面図と層序を見るために断面測図に入る。

8月28日(火)早秋の風が肌にこころよいので作業もはかどる。第9号住居址の測図を完成し、昼休みに調査員と一部の補助員が集まり、次の点を打合わせる。

1. 8月29日を調査終了日とし、住居復元をする場合、第2号と第6号住居址の2つを候補にあげる。2. 報告書は各区ごとにまとめる。その前に概報を作り報告会をもつ。

午後、岡島市長をはじめ築波教育長・加古社会教育課長・山本用地第一課長(前社会教育課長)来訪、豊明市文化財保護委員10数名も視察にこられる。

8月29日(水)調査発掘終了の日。スモッグにおおわれたような空、太陽はにぶい光りをカブト

山一帯にそそぐ。第1区は前日に測図終了し、きょうは写真撮影。第3区は第9号住居址を東へひろげる作業を3時ごろ終了、並行しておこなっていた測量も終る。第2区は、第6号住居址の外側の溝状遺構を入口付近から追つたが、南西の壁のコーナー付近で消えており、作業終了とする。各区の作業も終了する。

8月30日(木)第2区は作業が遅れたため地層の断面図をとる。アルバイトをはじめ人夫は残務の整理。諸道具をつぎつぎに搬去し市職員の手で運搬されていく。埋めもどし作業は、文化庁の係官の視察を待つておこなわれる予定になつていたが、中止になり9月2日にこれをおこなうことになる。あわただしく過ぎた11日間を語り合いながら、散つたごみの始末をして、第2次カブト山発掘調査の仕事を終了する。

(三渡俊一郎・池田 陸介)

発掘参加者(敬称略)

| | | | | | | |
|--------|------------|-------|----------|----------|-------|--|
| 調査指導委員 | 澄田 正一 | 久永 春男 | 井関弘太郎 | | | |
| 調査員 | 杉崎 章 | 三渡俊一郎 | 磯部 幸男 | 立松 宏 | 加藤 岩蔵 | |
| 調査補助員 | 大下 武 | 片山 正樹 | 木田 文夫 | 水谷 和喜 | 山下 勝年 | |
| 参加者 | 池田 政治 | 北川 定務 | 都築 義秀 | 中山 善夫 | 森下 雅彦 | |
| | 伊藤 正一 | 新家 和美 | 中川 政人 | 山原 紀子 | 吉村 睦志 | |
| | 山中 辰次 | 山中やす子 | 佐藤つや子 | 近藤 令子 | 竹内 公明 | |
| | 常滑高校生25名 | | 大府高校生10名 | 横須賀高校生2名 | | |
| | 東山工業高校生1名 | | | | | |
| | 東海市文化財調査委員 | | 加古 重光 | 片田 秀一 | 早川 克巳 | |
| | 浅井 啓吉 | 提 文二 | 早川 信三 | 長谷川昭二 | 池田 陸介 | |
| 庶務 | 市教委社会教育課 | | 加古篤生課長 | 石岡 隆係長 | 荻田 昌弘 | |
| | 吉田 清孝 | 大島 邦明 | 寺田 哲祐 | 佐藤えり子 | 蟹江真由美 | |
| | 各主事 | | | | | |

第三章 第 1 区 の 調 査

1. 発 掘 の 経 過

8月20日 第1区は予備調査の試掘溝であるdトレンチを中心にした地区である。dトレンチの北端に見られる溝状遺構、ほぼ中央にあつて高坏や甕の破片を多く出土した大きなピット、さらにトレンチの断面図にみられる有機層の堆積状況や地山の傾きなど考えあわせて調査計画を立てた。

まず、溝状遺構を追求するためdトレンチの北端へ東西へ、さらに北へと試掘溝を入れそれぞれのd₁・d₃・d₂トレンチとして発掘調査を開始した。各トレンチとも表土(耕作土)下に小礫まじりの灰褐色をした有機層があり、土師器や須恵器などの土器が細片となつて出土した。この層の下には同じように小礫をまじえ、やや粘り気のある黒褐色有機層があり、本日はその上面を出して作業を終る。

8月21日 黒褐色有機層は厚さ20cm前後で小礫をまじえかたくしまつた黄褐色土層に達する。これが地山である。d₃トレンチは有機層を掘り上げ地山面で清掃したところ、地山は北東から南西へかけてわずかに傾斜し、その西南隅に部分的に地山が落ち込んでいることがわかつた。そしてd₁トレンチ内の地山は西から東へ傾斜していた。

8月22日 d₃トレンチの西南隅の有機層をとり地山の落ち込みを調査したところ、南へわずかにのび、西はdトレンチの溝状遺構へとつづいていた。溝状遺構はd₁トレンチへ約50cmほどのびて終つていた。d₁・d₃トレンチの地山の傾斜を考慮に入れ、dトレンチに平行して、d₄・d₅トレンチを設定し調査をすすめる。

有機土層からは須恵器や土師器が出土した。少量ではあるが弥生後期の土器もみられた。また一片ではあるが、d₁トレンチとdトレンチの境界を取る作業で、灰褐色有機土層から縄文晩期の土器が検出された。

8月23日 d₄・d₅トレンチの調査をする。d₄トレンチの作業がすすみ、有機層を取つたところで地山に掘り込まれた5個のピットを確認した。午後はd₅トレンチに主力をおき調査をする。

8月24日 d₅トレンチの作業が黒褐色有機層の調査へとすすんだ。この層からは土師器の出土がめだつて多い。しかしいずれも細片で、蓋坏などの須恵器や弥生後期の土器片もまじる。d₃トレンチよりも1辺50cm内外の方形をなすピットを確認した。午後は各トレンチの境界を取り、清掃しながら地山面の調査をする。柱穴となるようなピットが多く検出された。これらは3~5個ずつ1組となつて4群に分かれ、しかもほぼ正方形の頂点にあたるどころにかたまつていたことがはつきりした。

8月25・26日、前日の調査によつて発見されたピットを精査する作業とともに、ピット群のあり方からd₄トレンチをさらに西へ拡張d₆トレンチとして調査をすすめる。

4つのピット群には、群の中にそれぞれ1個ずつ深さが40cmを越すものが含まれ、しかもそれをむすぶとほぼ正方形になることが判明した。この4個のピットは主となる柱を立てた柱穴であり、北側の溝状遺構、南の大形ピットなど考えあわせ、第3号住居址として確認した。

d₆トレンチでは主となる柱穴p₁₃、p₁₆とほぼ平行に約90cmの間をおいて10cm前後の段状部を検出、この住居址の西壁と考えられるものである。なおこの段状部には、地山の上面におかれた形で土師器の甕が出土した。確実にこの住居址にともなうものといえる唯一の資料である。

8月27・28日 発掘区全体の清掃をし、測図にかかると。d₅トレンチ内で確認した方形のピットp₆のふちにこの住居址の東壁の残欠があり図に入れる。住居址の東西の幅は約3.6mである。

平面形につづいて断面図をとる。地山は、全体に北から南へわずかに傾斜している。とくに土器を多量に出土した大形ピット P₁₀ を境界に南へ傾斜が大きくなっている。

8月29日 ピットの大きさや深さなどの形状、ほかに溝状遺構などを実測、写真撮影をして発掘調査を終了した。

2. 第 3 号 住 居 址

(1) 遺 構 (挿図第3)

第1区の調査で確認した遺構は、北側の溝状遺構も含め、東と西にみられる大形のピッチ (P₆、P₁₀) とほぼ4つの群にわかれる柱穴で構成される住居址 (第3号住居址) と、地山の傾斜が強まる発掘区の南にあるピット群である。

発掘区の層序は、表土層 (耕作土) の下に灰褐色で小礫のまじる有機土層があり、さら黒褐色で同じように小礫をまじえた有機土層が小礫をまじえ固くしまった黄褐色土層 (地山) の上に堆積するという状態であった。表土層の上面から地山まで60cm内外の厚さである。地山は発掘区の北側、溝状遺構から南へ約4mの間は、わずかな傾斜はみられるがほぼ平坦となつている。しかし、ここからさらに南へは6度内外の傾斜をもつてきがつていく。

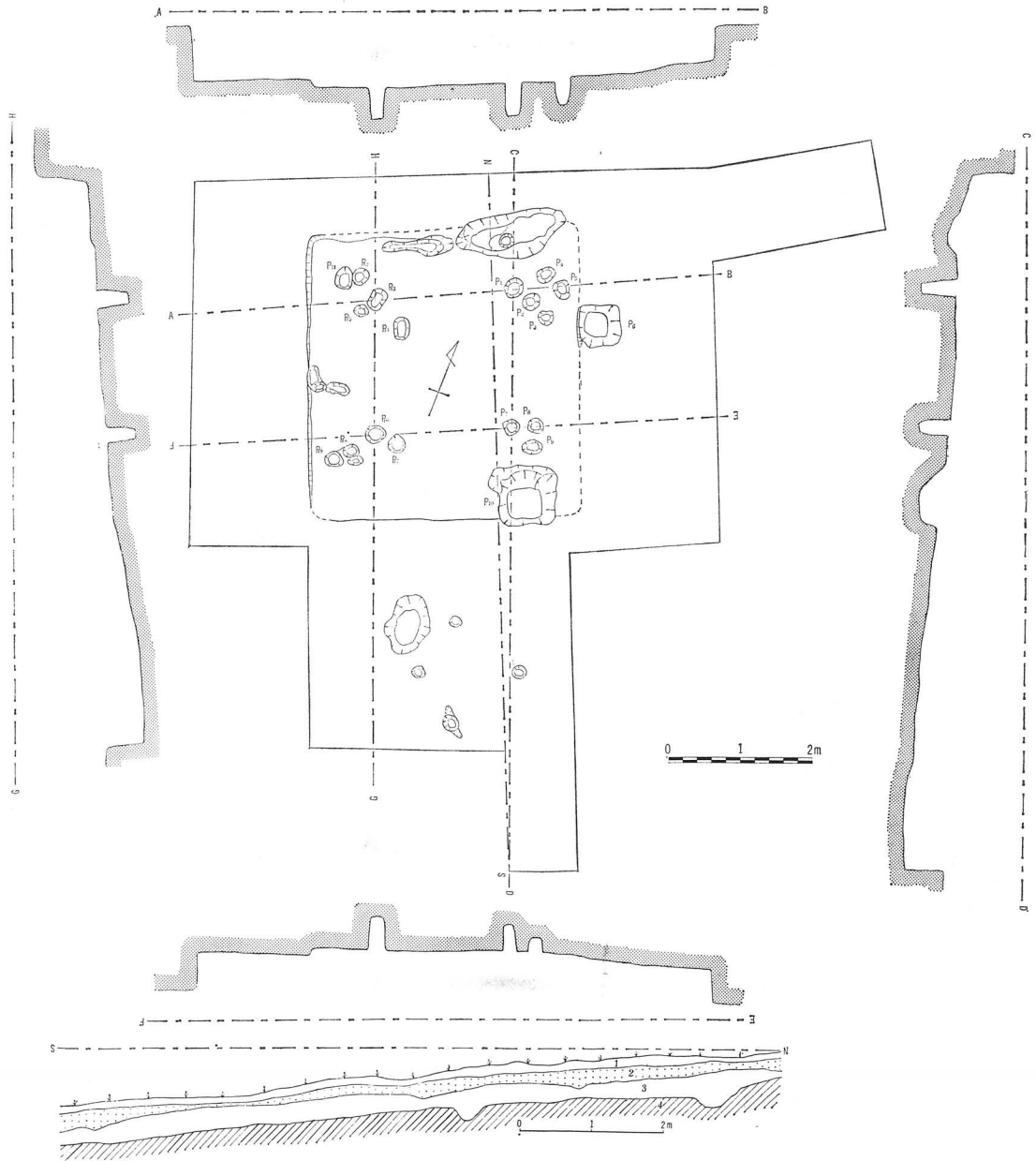
第3号住居址はこの地山を床面とし、柱穴を掘つて構築されていた。住居址は軸をほぼ南南東にとり、4面の壁は西壁と東壁の一部を残すのみで北側は溝状に掘りくぼめ壁としている。南には壁の痕跡を認めることはできなかつた。ただd₄トレンチの南端で黒褐色有機土層の中に部分的に茶褐色の堆積がみられたことから、もり土という格好の遺構のあつたことも考えられる。いずれにしても地山の傾斜の変わるところがこの住居址の南の境界であろう。第3号住居址の平面形は、東西約3.8m、南北約4mの方形をなし、隅は残存した北西隅でみられるようにほぼ直角に交わり、角はまる味をおびた格好である。

床面には、20個近いピットが検出された。これらは大形のものゝのぞいて方形をなす床面の4つの隅に群をなしており、その大きさ形は付表のごとくである。そしてそれぞれの群の中に40cm以上の深さをもつピットが1個ずつある。P₁、P₇、P₁₆、P₁₃がそれであり、この4個のピットをむすぶと、4辺のうちP₁—P₇が190cm、P₇—P₁₆は187cm、P₁₆—P₁₃とP₁₃—P₁がそれぞれ188cmとなる。また内角は、P₁とP₁₆が87.5度、P₇とP₁₃は94度を測り正方形に近い四角形の頂点に掘り込まれていることがわかる。これらのことからこの4個のピットが、この住居址の主な柱を立てた穴と推定することができる。

ほかのピットは、P₁₅のように径の小さい割に深さがあり傾斜をもつていること、また主となる柱穴P₁₃に近く掘られていることなど支柱にそえた柱の穴と考えられるものもあるが、その多くは時期を異にした柱穴と考えたい。

東南の隅に近く掘られた長径80cm、短径70cmと方形をなす大形のピットには黒褐色有機土がはいり、下部は炭化物もまじり一層黒くなつていた。そして上部からは土師器を主に須恵器もまじえた土器が出土し、下部の有機層からは土師器に弥生後期の土器もまじつて出土した。ピットの掘られた位置、形、大きさから貯蔵用の穴と考えることのできるものである。

この住居址の主となる柱を立てた穴と推定したピットと壁との関係を見ると、西側ではP₁₃、P₁₆いづれも壁まで90cmを測り、東壁ではP₆について残存した壁とP₁とP₇の中心をむすんだ線との距離でみるとやはり90cmとなる。そして北側は、溝状遺構の傾斜面まで90~100cmである。南については、壁はないが床面の限界を地山の傾斜が変わるP₁₀の南端と考えて、P₇、P₁₆をむすぶ線との距離でみると100cm内外である。



- d トレンチ断面 (S-N)
1. 灰色表土層
 2. 小レキ混り灰褐色有機土層
 3. 小レキ混り黒褐色有機土層
 4. 黄褐色基盤層

挿図第 3 第 1 区遺構 (第 3 号住居址) と d トレンチ断面図

(2) 遺物

遺物は耕作土である表土にもわずかに含まれていたが、そのほとんどは60cm内外の厚さで堆積していた有機層の中から検出したものである。そして鉄製品1例のほかはすべて土器であつた。

鉄製品 長さ4.8cmで断面は円形をなし、径は0.5cmである。両端を欠損してきびぶくれもひどく、形や機能を推定することも困難である。

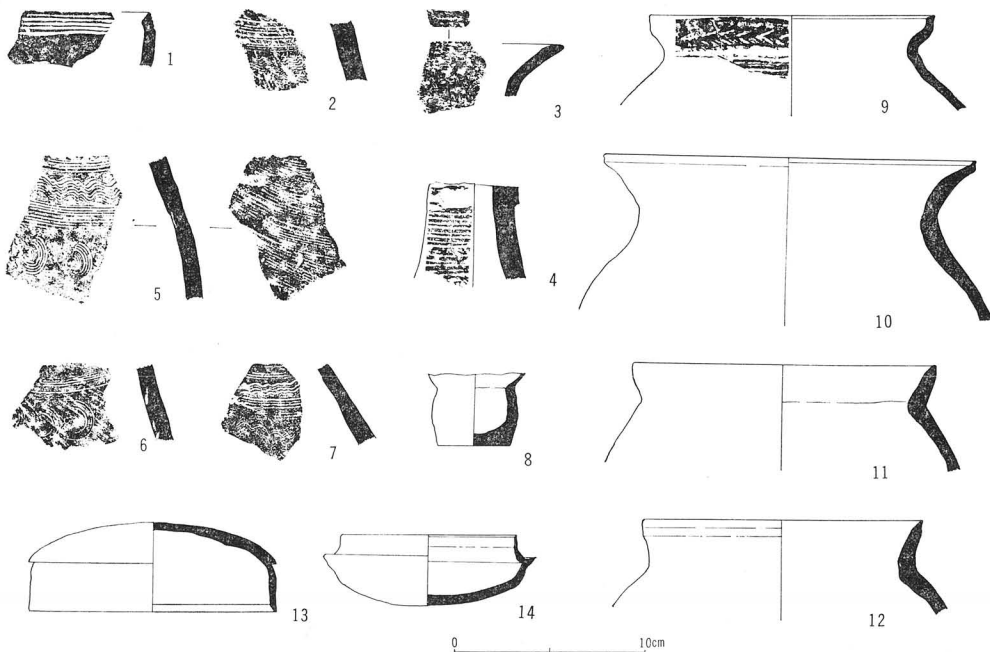
土器

a 縄文式土器(挿図第4の1) 1例、d₁トレンチの灰褐色有機土層から出土したものである。浅鉢の口辺部で、黒色を呈し器壁は内外ともによく研磨された精製土器である。口辺には櫛状施文具による5条の沈線がめぐらされている。縄文晩期大洞c式土器の段階に比定されるものである。

b 弥生式土器(挿図第4の2~8) 高坏形土器 坏の口辺部で、すどく折れて外反しながら立ち上がる部分で、櫛状施文具による波状文が施されている。なお口端内側には半割竹管による平行沈線が施文されている(3)。脚部はやや太めの平行沈線をめぐらしたもの(4)で、上半分1例のみの出土である。

壺形土器 拓本や図のとれたものは胴部のみ4例で、歯数9本の櫛状施文具で平行沈線と波状文を交互に入れ、下方に同じ施文具で同心円文を横にならべるといった文様構成をもつもの(5)、(6)や歯数5本の櫛で平行沈線と波状文とを交互に施文しているもの(7)がある。ほかに器高約4cm、底部の径が3.8cmで口径約5cm、口辺が外反する器形のたくじり(8)が1例ある。これらの土器は器形や文様の特徵から弥生後期の寄道式土器に比定できるものである。

c 土師器(挿図第4の9~12) 測図のできたのは甕形土器4例である。S字状をなす口辺の外側に、櫛状施文具による右傾のきざみを連続施文したもの(9)。口辺部が外反し、口端の立ち上がる土器で、肩から胴部へかけて左傾の条痕文を有するもの(10)。やや厚手の作りで、口辺が短かくわずかに外反する土器で、肩から胴部へかけて不規則な荒い条痕がみられるもの(11)、(12)などがある。



挿図第4 第1区出土の遺物

これらの土器は、その器形から青山式土器の古い段階と推定でき、古墳時代前期終末から中期の前半に比定されるものである。

d 須恵器 (挿図第4の13,14)

多くが細片で長頸埴の口辺と思われたものや甕の胴部もみられたが、測図できたのは蓋杯の蓋と身がそれぞれ1例である。蓋の頂部と口辺の境にはえぐりが入り段状部を作りだしている。口辺は垂直におり、幅は2.5cmである。杯身は口径11cmとやや小形で薄手な作りである。蓋受けは高さ1.2cmでわずかに内行し、口端は細かく細工され段状をなし薄く仕上げられている。この2例のうち前者は須恵器第Ⅰ型式の段階に、そして後者は第Ⅱ型式の段階に比定できるものである。

3. 小 結

第1区の調査で確認された第3号住居址は、北から南へかけてさがるゆるやかな傾斜面にある。住居は6度内外の傾斜をなす黄褐色土層(基盤)を、高い北側で切り下げ、ならして、南北4m、東西3.6mの平坦面をつくり床としている。この床面をつくる過程で北側には高さ30~40cmの壁が、そして東と西には10~20cmの壁がつくられ、堅穴住居の形となつている。壁のみとめられなかつた南側の床面の境界を地山の傾斜が大きくなる線で考えると、この住居址の平面形は、南北にやや長い隅丸方形となる。

床面には大形のピットや溝状の遺構のほか20個のピットが認められた。これらのピットは方形をなす床面の四隅に3ないし5個ずつ群をなして、各群には深さが40cmをこすピットが1個ずつ含まれていた。この深さとともにこの4つのピットは、芯と芯で測つて1辺約185cmの正方形の頂点にあたる位置にあり、この住居址の主となる柱穴と考えられる。

床面と柱穴との関係を見ると、側壁と柱穴、対応する柱穴の距離は東西では90cm、185cm、90cmとなり、その比はおよそ1:2:1となる。南北でもそれぞれ対応する柱穴を見通した各部の距離を測定すれば、これに近い数値を得ることができる。このことは上屋を支える主要な柱が、プランを一定の比によつて分割し、位置を定めて立てたことを示すものである。

第1区から出土した土器には、1片ではあるが紀元前3~4世紀までさかのぼることのできる縄文晩期の土器や、3世紀中葉に比定できる弥生後期の土器もある。そして古墳時代の土器には、土師器と5世紀の中葉から後葉にかけての須恵器がある。しかし第3号住居址にともなう資料はわずかで、床面や側壁近くに置かれ状態で出土したもので、すべて土師器であつた。測図できたのは甕1例(挿図第4の10)であるが、その器形から5世紀前葉と推定される青山式土器の古い段階に比定されるものである。(磯部 幸男)

付表 第3号住居址ピット寸法

(単位cm)

| ピット番号 | 深さ | 長径 | 短径 | 備考 | ピット番号 | 深さ | 長径 | 短径 | 備考 |
|-------|----|----|----|--------|-------|----|----|----|------------------|
| 1 | 47 | 28 | 24 | | 11 | 23 | 31 | 20 | |
| 2 | 23 | 22 | 20 | | 12 | 27 | 24 | 20 | 土器 2片 |
| 3 | 25 | 19 | 18 | | 13 | 40 | 30 | 20 | 土器 2片 |
| 4 | 30 | 23 | 18 | | 14 | 23 | 36 | 21 | 土器 4片 |
| 5 | 35 | 25 | 20 | | 15 | 30 | 17 | 16 | |
| 6 | 39 | 70 | 64 | 土器 14片 | 16 | 41 | 24 | 22 | 土器 2片 底に小礫 1個 |
| 7 | 41 | 22 | 20 | 土器 3片 | 17 | 34 | 25 | 24 | |
| 8 | 20 | 22 | 21 | 土器 2片 | 18 | 16 | 18 | 16 | |
| 9 | 23 | 30 | 20 | | 19 | 20 | 24 | 22 | |
| 10 | 38 | 80 | 75 | 土器多数 | | | | | |

第四章 第 2 区 の 調 査

1. 発掘の経過

8月20日 本日より本調査開始、eトレンチを東西両側に拡張するため草根の除去。東方区E1区の表土を除去。土器が少量出土す。

8月21日 前日につづきE2-5区の表土を除去し、E1-2区は地山層に達す。西方区W1-4区の表土を除去。土師器・須恵器が出土。

8月22日 E3区地山面まで剥ぎ、第6号住居址の東壁があらわれる。発掘区をさらに東に拡張しE5-7区の草根を除去する。E5区は表土層の除去をおわる。W1-2区は地山面に達し、第5号住居址の北壁あらわれる。本日は土器の出土量多し。

8月23日 E6-7区の表土層除去を終了。第5号住居址床面のピット検出作業をする。ピット5個発見。第6号住居址の西壁の一端があらわれピット1個発見。本住居址の上層部よりは土器の出土多し。

8月24日 第6号住居址の床面を全面的に出し、その南壁を追求するため南へ2m拡張。e4E4と称す。

8月25日 第6号住居址の床面ピットを検出す。柱穴、炉址・貯蔵穴あり。南壁はなし。一方E5-8区を地山面まで掘りさげ、第5号住居址の東壁が半分あらわれる。壁線の南北両端に各1個のピットあり。本区よりの出土土器は稀少であり、大礫を数個集合させる個所あり。

8月26日 第5・第6号住居址床面の再点検をする。W6-7区を西へ拡張し、第5号住居址の西壁を追求するもなし。本区の西に遺構の一部検出。本区より須恵器・土師器出土す。

8月27・28日 第6号住居址の出入口部を発見、内側周溝にそつて礫を数個配列し、出入口の西前面に礫の集積あり。第6号住居址の平面図作図し、また発掘区内の清掃を行う。

8月29日 第6号住居址の西方に溝状遺構を発見、またW8区を拡張して昨日発見の礫集積の南・西限を追求する。第2区内の遺構の平板測量ならびに写真撮影を終了し、本日をもつて発掘調査を打切ることになる。

8月30日 発掘区内の土質を記録。終了後池田氏宅にて出土遺物の整理をおこなう。本文にて示したE1-8、W1-8区については挿図第5を参照すること。

2. 第 4 号 住 居 址

試掘で調査されたeトレンチを拡張してできた東西9m、南北12mの第2発掘区内に検出された住居址は第4・第5・第6の3住居址である。まづ本発掘内の層序(挿図第5)についてのべる。

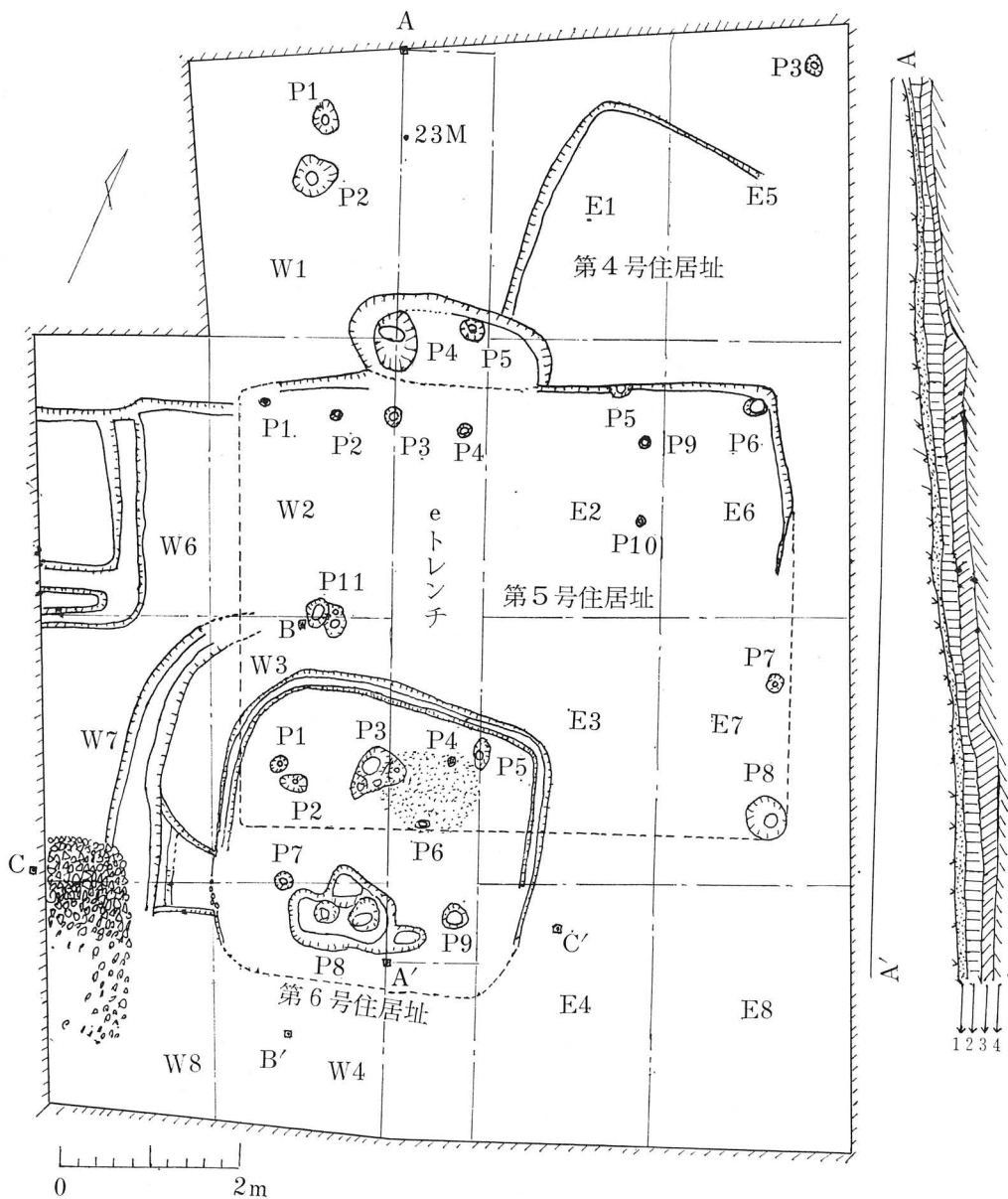
eトレンチ西方断面図(AA')にその状況が示されている。すなわち表土層は小石混りの灰色を呈する耕土層(10cm)で、つぎに小石を少量ふくんだ砂質でやや粘性のある灰褐色土層(10~20cm)がつづき、その下には小石が多量にみられる粘性の強い褐色土層(0.5~30cm)が地山上に堆積している。上から第1層~第3層と称することにするが、地表から地山面までの深さは北部では浅く、中央部では深い。なお断面図に示されないeトレンチの南方は小石をほとんど含まない灰色土層になっている。

地山層は小石を多量に含む赤褐色土層で、北から南に1/10弱の傾斜でくだり、地山面には遺構が以下に示すごとく掘られている。遺物は中央部より多量で多く出土した。

遺構(挿図第5)発掘区の北東部でE1・E5区にあるのが本住居址で、作業日数の不足のため

床面まで掘りさげできず、壁面の一部を検出するにとどまった。北壁は北方向に直角で、西北隅より2 mばかりでその先は追求できなかつた。西壁は2.4 mばかりで、その南端は第5号住居址北部のピット内で消えている。

床面の調査が未了なので柱穴の位置や遺物の有無についても明白ではなく、次の調査にかかつて



e トレンチ断面 (A'-A)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 灰色表土層 | 2. 小レキ混り灰褐色有機土層 |
| 3. 小レキ混り黒褐色有機土層 | 4. 黄褐色基盤層 |

挿図第5 第2区の遺構(第4・第5・第6号住居址)とe トレンチ断面図

いる。なおE5区の東北隅に小さいピットP₃を発見している。

遺物(挿図第7)本住居址上層内で出土した遺物は第2表にしめすごとく次のものである。無蓋高坏(42)口辺部で須恵器である。

器台(44)口縁部で、上記とともにうす肉で製作は入念である。器表には細い波文が幾段にもめぐっている。

3. 第5号住居址

遺構(挿図第5)発掘区の中央部に存在する遺構である。北壁、東壁の一部およびピット群が残存する。これを住居址とみるには疑問ももたれる完備しない遺構である。

北壁は東西方向より北に偏しているが、長さ約6mをはかり、その中間にある浅い大きなピットのため壁面が切れている。北壁の両端にはピットP₁・P₆が存在し、このピット間にはP₂・P₃・P₄・P₅・P₉のピットが並ぶが、P₅のみが壁線上にあり、その他は床面上にほぼ一直線上にほられている。この直線とP₉・P₁₀とを結ぶ線は直角をなし、P₁・P₂間とP₃・P₄間は0.8mと等間隔であるのは注意をひく。

北壁の東端に直角方向に東壁が一部残存し、その南の延長線にP₇・P₈のピットがあるが、P₈が東壁の南端を示すものであろう。P₆・P₈間は4.6mをはかる。P₂の南方約2.2mの位置にP₁₁が掘られているが、P₂・P₁₁をむすぶ線と上述したP₁・P₉を連ねる線とは直交することを示している。

P₁を北端とする西壁や、P₈を東端と考える南壁の痕跡は今回の発掘では検出できなかった。これは北壁の高さがP₅の位置で12cmときわめて低く、かつ地山面が約1/10の傾斜で南にさがっているので、南方床面は地山上に盛土をしていたことが考えられ、なおかつぎにのべる第6号住居址の床面を埋立てて構成されているため、その確認にはきわめて困難であつたとしたい。

第5号住居址の北方にはピットP₁・P₂が掘られ、また本住居址の北壁面にそつて掘られた大きなピットは、その長径が2.2mで短径は0.8mであり、その中にさらにP₄・P₅がある。このP₄・P₅は、第5号住居址に属するP₃・P₄とともに正方形に近い面形を呈するが、ここには第6号住居址に付属する空間があつたと考えることもできる。

なお、以上のピットのほか、第6号住居址の西方には一辺の長さ1.8mばかりの深さ18cmの遺構の一部があらわれ、ここからも土器を採集した。この遺構の性格については今後の発掘により明白にされるであろう。

遺物(挿図第7)本住居址上部層内で出土した遺物はE3区第3層、E6区第1層およびW2-3区第3層出土のもので、第3層出土のものが住居址に近い年代を示すものと考えられる。

壺(20)口端縁に凹線をめぐらし、上面には山形の線列をきざんでいる。

有蓋高坏(39, 40, 43, 45) いづれも破片で、蓋・身・脚部の一部である。

甕(46, 48, 50, 51) 胴部で、器表には細い平行叩目文と粗い平行叩目文をほどこしたもの、および格子目叩目文のあるものである。

石器(53)退化した剣形石製模造品かとみられる無孔のものである。

第5号住居址の西方の浅いピットから出土した遺物を付記しておく。

高坏(2, 10) 深い坏部の破片と、円筒状の裾部のひらく脚部である。

壺(16, 18) 口端部はたれさがり、広い端面には1条の凹線をめぐらしている。

坏(41) 須恵器の身部で口端は鋭く仕上げたものである。

甕(49) 須恵器で粗い平行叩目文のある胴部である。

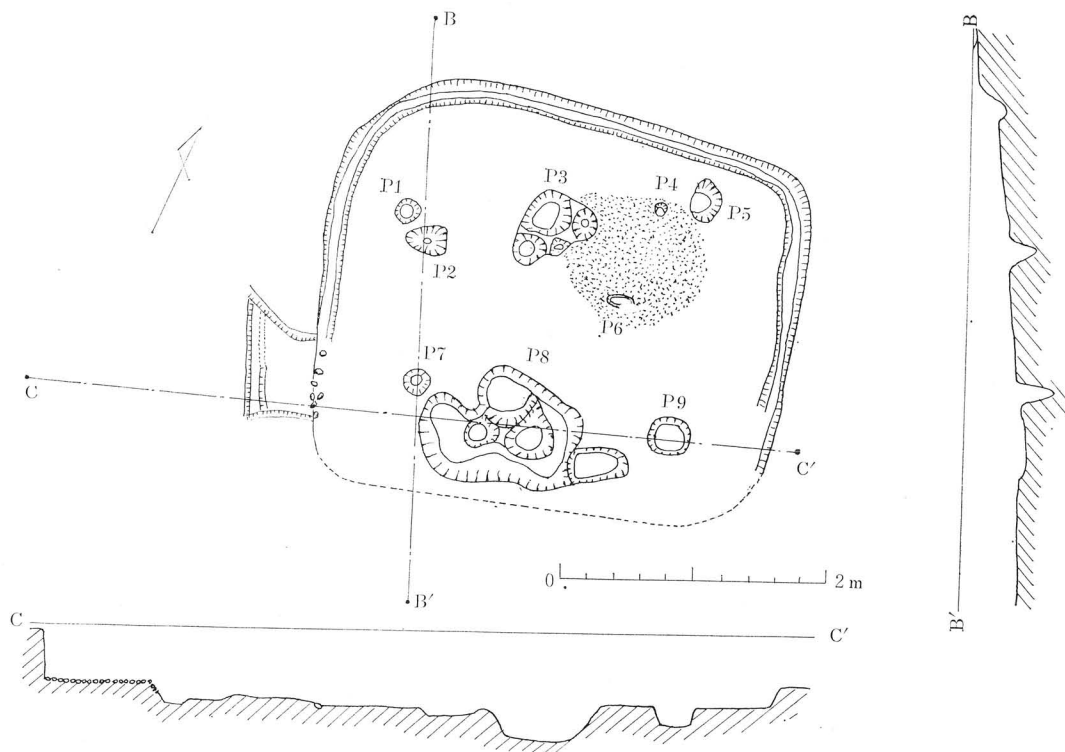
4. 第6号住居址

遺構（挿図第5・第6）本住居址の位置は発掘区の南部で、今回の発掘により発見された住居址のうちでは最低位置にある。その北壁はほぼ東西方向をしめし、東壁は南端の隅丸部直前まで、西壁は同様、隅丸部の半分ほどまで残存している。相對する東西両壁間の距離は中央部で3.6 mをはかる。これら側壁下には幅15cm、深さ6 cmほどの周溝が掘られ、北壁の高さは16cmばかりあるが、南壁は全くみることができなかつた。

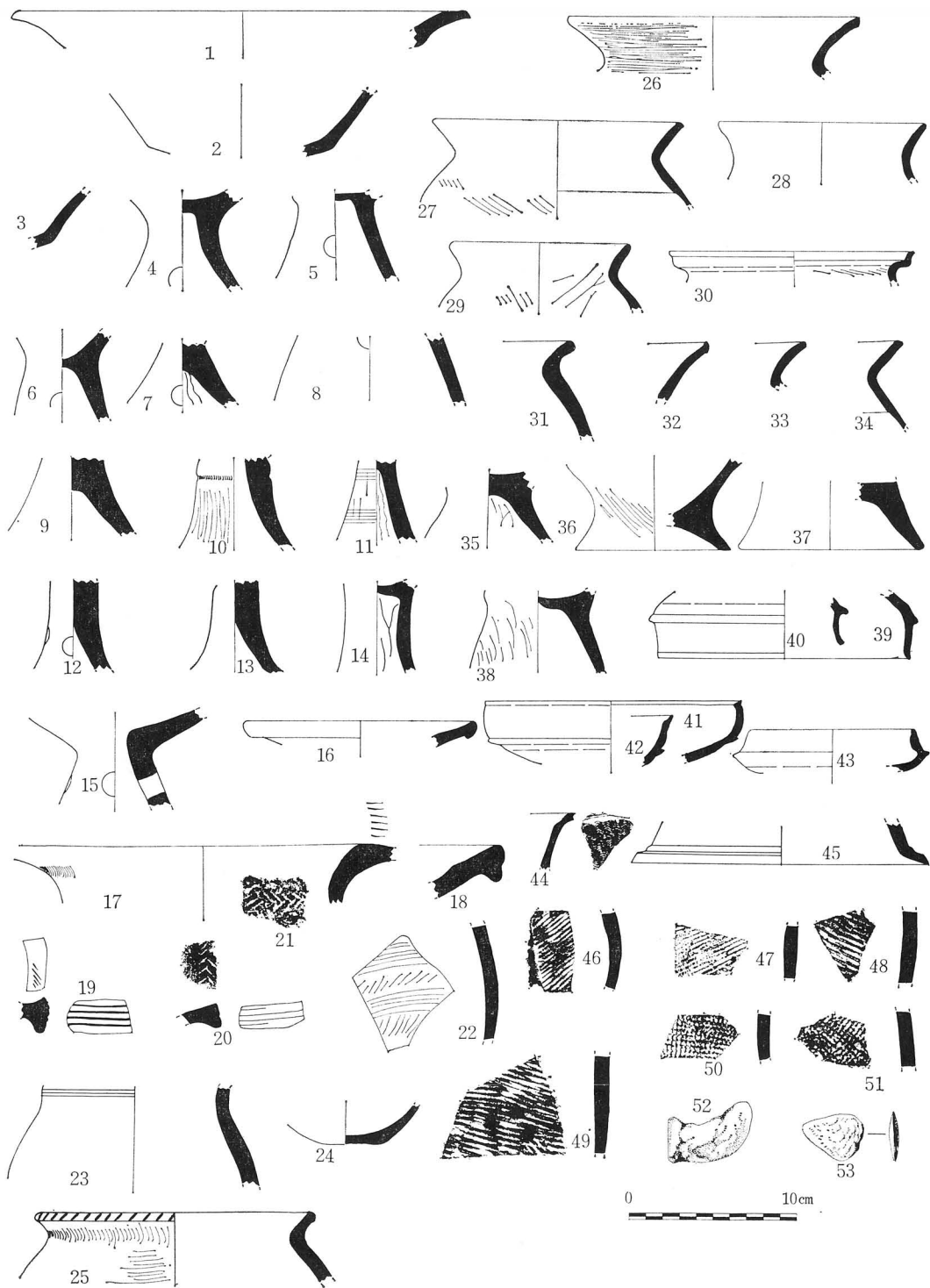
床面は地山に掘られ、北に高く南に低い1/15の勾配を示している。この床面に掘られたピットの寸法は附表のごとくで、9個のピットがある。このうち屋根を支える支柱穴はP₂・P₅・P₇・P₉とみられ、これらをむすぶ四辺は台形を呈する。P₂・P₅間にあるP₃は炉址とみられ、その東方に焼土が径1 mの不正円形にひろがつていた。P₈はきわめて複雑な平面形を示すが、貯蔵穴とみられ、最深の部分が本来の貯蔵個所であろう。

西壁の南端に近い場所に住居内への出入口が設けられている。ここは壁面が内側で60cm、外側で1 mにわたりけずりさげられて、底面よりわずかに高い。周溝の部分には直径6~7 cmの丸石が数個おかれ、ここより50cm外側には低い小堤が平行して掘り残されている。さらにこの小堤の西側には南北方向の溝が住居址内への浸水を防ぐ目的をもつかのように幅30cmで深さ20cmに掘られているが、その南部は礫の集積により破壊され、北部はその幅を次第に減じつつ第6号住居址の西壁にそつて曲り、やがて痕跡を失つている。

上述した礫の集積は南北方向2 m余にわたり、径3~8 cmの丸い礫が厚さ20cmと重なつて、隙間には灰色の砂が充満する。この中から甕の脚部2個を発見したので、この集積は人工的なものであ



挿図第6 第6号住居址実測図



挿図第7 第2区出土の遺物

ある。付近在住の古老の談によれば、近世以降において畑よりひろい出し小石を集めて土中に深く埋めたものであるという。

遺物(挿図第7)第2表に示すごとくe s区W4区第2層、および第6号住居址の上層部から出土したものなどである。しかし、床面直上の出土物は確認できなかった。

高坏(1,3~8,11~14)深い坏部および浅い坏部の2種、それに上部から下部にかけてひろがる脚部に1孔をあけたもの、おそび上部は棒筒状で下部でひろがる脚部の2種がある。浅い坏部には棒筒状の脚が、深い坏部には次第にひろがる脚部が付せられたものと考えられる。

器台(15)坏部は逆八字状にひろがり、脚部もまた次第にひろがる4孔をもつものである。

壺(17,19,22~24)ラツパ状にひろがる口縁部の端部上面に平行文を飾るもの、ひろい口縁端面に凹線を、上面に斜行文をほどこしたものの、胴部に平行文と斜行文を交互に重ねたもの、頸部に3条の平行文をめぐらすもの、および中央部がやや上げ底になる底部などが出土した。

甕(25~38)口頸部はく字形にひらき、口端に刻みをつけたもの、その省略されたもの、および口端部で折れ立つS字形のものなどがある。脚部は八字形にひらくが、特に背の低いものが1片あつた。

甕(47)須恵器で細い平行叩目文をもつ。把手(52)土師器質の甑か、かまどの残欠片とおもわれるものである。

5. 小 結

第2発掘区では上述のごとく、第4・第5・第6号の3個の住居址をみとめたが、第4と第5号住居址とは切りあい、第5と第6号住居址もまた切りあつている。切りあいの存在する住居址の前後関係は床面上のものが新しいとされているが、この仮説にしたがえば、第6号がもつとも古く、ついで第5号・第4号と新しくなる。それでは各住居址の時期はいつになるのであろうか。

住居址の時期 第6号住居址の時代を知るにたる資料は確実なものは出土していないが、第6号住居址内に捨てられた土器は前述したごとくで、弥生後期(寄道・欠山式)と土師器および須恵器がある。しかし須恵器は1片のみであるので、最も多数出土した欠山式土器と土師器の共存する時期が、この住居の廃止の期に近いものと考えられ、古墳前期後半とみて著しいずれはないであろう。

つぎに第5号住居址においても床面上出土の確実な資料がないので、時期決定の決め手を欠くが、上部層から古式の甕片、すなわち細い平行叩目文および格子目叩目文のあるものを出土したので古墳中期中頃のものではなからうか。

最後に第4号住居址の時期は前にも述べたように床面までその調査が及ばないので、時期決定はさらに不確定なものとなるが、第5号住居址より新しく、上部層より須恵器を採集したので、古墳中期末頃のものでなからうか。

第3発掘区内に発見された第7号住居址と本住居址は接近し、本住居址の方が床面が高いので、第7号住居址よりは新しい時期とされよう。

住居の構造 第4号住居址は完掘してないので、その構造について言及することはできない。また第5号住居址はその壁面および柱穴の検出が、およそ半分を欠くので同様にその言及は困難なともなうが、あえて推察を進めてみたい。

本住居址の規模は東西約6m、南北5mの大きさで、第一次発掘調査の第2号住居址につぐ規模をもつ。浅い床面、壁面にそつた多数の柱穴の配置などから、これは竪穴住居址ではなく、平地住居址の類ではなからうか。すなわち、竪穴住居址内にみるとき屋根を支える主柱のある位置に、これに該当する柱穴を検出しえなかつたこと、および北壁にそつたほぼ一直線上にならぶ柱穴群、

また三隅にある3個の柱穴などは著しい相違点である。換言すれば三隅の柱穴は、第6号住居址の西壁中央部付近に存在したと推定される柱穴とともに建物の屋根を支持する梁・桁などがこの上に架せられた柱として立てられる。また西方よりにある南北壁間の中央に位置したP₁₁は、今回の調査では確認できなかったが、これと対称位置にある東方の柱とともに、棟木を支える支柱であると考えられ、垂木が上記した梁より棟木に架せられたのであろう、そして本住居址の外観を復元すれば、名古屋市守山区吉根・松が洞第8号古墳より出土した家形埴輪にみるごとく入母屋風のつくりではなかつたかと想像される。(注1)

なお、本住居址の上層で出土した格子目や細目の平行印文須恵器甕の破片は名古屋市東山古窯址群では未発見のものであるので、遠く畿内地方から移入されたものと考えたい。(注2)

第6号住居址は東西3.6m、南北3.2mの隅丸竪穴住居址と推定される。床面中央、北よりに炉址、南よりに貯蔵穴をもち、屋根をささえる柱穴間の配置は歪んでいて、著しく貧困な生活を連想させる。西壁の中央部より南方に設けられた出入口も幅60cmばかりで、やつと出入りできる狭いものである。本住居址は前回、今回の発掘を通じて、その規模は最少の住居址で、その位置も最も低い所に営まれ、階級の低い住民の住居であろうか。

(三渡俊一郎・池田陸介)

注1 守山市教育委員会『守山の古墳』1963

注2 田辺昭三 『須恵器の誕生』 日本美術工芸 昭和46年

第1表 第2発掘区内ピットの寸法 (単位cm)

〔第5号住居址〕

| ピット No. | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | P6 | P7 | P8 | P9 | P10 | P11 |
|---------|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 長 | 径 | 13 | 20 | 27 | 19 | 21 | 30 | 20 | 40 | 14 | 14 | 54 |
| 短 | 径 | 13 | 18 | 20 | 16 | 19 | 25 | 20 | 40 | 13 | 11 | 34 |
| 深 | さ | 14 | 10 | 14 | 18 | 10 | 20 | 7 | 10 | 14 | 13 | 23 |

〔第6号住居址〕

〔住居址外〕

| ピット No. | | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 | P6 | P7 | P8 | P9 | P1 | P2 | P3 | P4 | P5 |
|---------|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 長 | 径 | 19 | 32 | 70 | 16 | 33 | 20 | 21 | 90 | 33 | 35 | 50 | 20 | 60 | 20 |
| 短 | 径 | 15 | 17 | 50 | 10 | 24 | 15 | 19 | 80 | 32 | 27 | 50 | 20 | 60 | 20 |
| 深 | さ | 8 | 20 | 16 | 7 | 15 | 9 | 26 | 33 | 15 | 18 | 27 | 11 | 14 | 32 |

第2表 第2区内出土の区別遺物

| 区名 | 層位 | 遺物実測図(挿図第7) | | 該当する住居址 |
|------|-----|--------------------------------------|------|------------|
| | | 弥生式土器・土師器・(石器) | 須恵器 | |
| e s | | 8, 9, 15, 17, 19, 22, 24, 28, 37, 38 | 47 | 第6号上 |
| E3 | 第3層 | 20 | (53) | 40, 50, 51 |
| E5 | 第1層 | | | 42, 44 |
| E6 | 第1層 | | | 39, 45 |
| W2,3 | 第3層 | | | 43, 46, 48 |
| W6 | 第2層 | 16, 18 | | 41, 49 |
| W7 | | 2, 10 | | — |
| 6Y | | 1, 3~7, 11~14, 23, 25~27 29~36, 52 | | — |

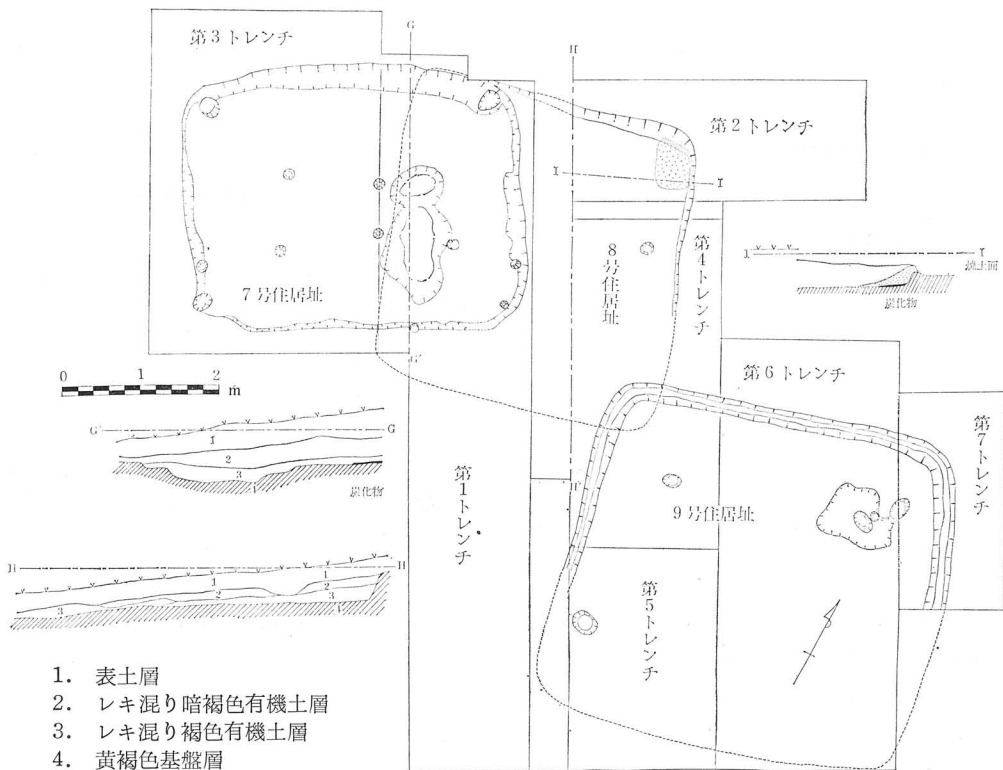
第五章 第3区の調査

1. 第3区住居址

当区内では計7つのトレンチを設定し、3戸の住居址を確認した。発見の順に従って第7号・第8号・第9号住居址とする。その各号はいずれも重なるか、切り合う位置関係にあり、とくにピットの関係はきわめて推定が困難である。以下、各住居址ごとにその状況を述べてみよう。

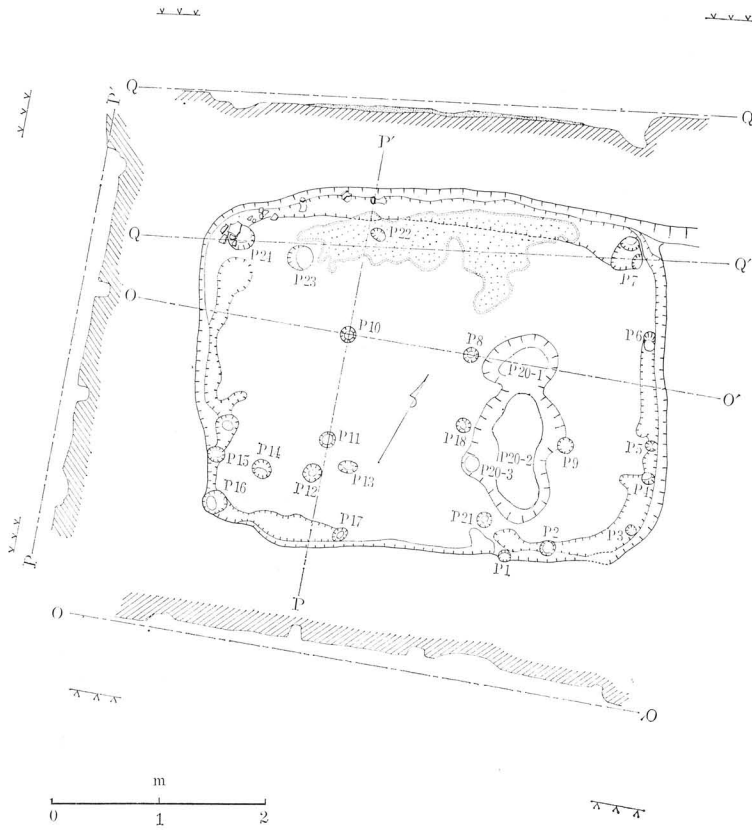
(1) 第7号住居址

確認された3住居址の中で、最も保存の良いものである。基盤を約20cm前後も掘り込んだ竪穴式住居で、その平面形は長辺4.2mそして短辺3.2mの隅丸方形である。壁面にそつて20cm~40cm巾の溝状の掘り込みを有する。住居址内に計24個のピットが存在するが、第8号住居址と切り合っているため、すべてを本住居址に関連するピットとはみとめ難い。その位置から考え南西隅のP11・P12・P13の一群は、P10に対応するが、東側については1.8m×0.8mの不整形掘り込み部(P20)によつて破壊せられたとも考えられる。事実このあたりから南にかけて、やや床面の不整合、さらに壁面の一部破壊がみとめられ、後世の変形が想像される。なお四隅にあるピットがいずれも内傾している点は、本住居址の構造復元を考える上で留意されなければならない。住居址内床全面から検出される炭化物、とくに北側からは柱形をとどめるものが重なり合う状況で発見されている。最終生活時における火災による放棄と考えられる。



挿図第8 第3区遺構(第7・第8・第9号住居址)

第7号住居址ピット寸法 (cm)



挿図第9 第7号住居址実測図

| P No. | 長径 | 短径 | 深さ | 傾斜 |
|-----------------|------|------|------|----|
| 1 | 15.5 | 13 | 18 | 直 |
| 2 | 18 | 13.5 | 9.5 | 直 |
| 3 | 9.5 | 9 | 10 | 内 |
| 4 | 13 | 10.5 | 14 | 外 |
| 5 | 12 | 10 | 10 | 内 |
| 6 | 19 | 12 | 20 | 外 |
| 7 ₁ | 25 | 18.5 | 14 | 内 |
| 7 ₂ | 16 | 10 | 21 | 内 |
| 8 | 17 | 13 | 10.5 | 直 |
| 9 | 16 | 14 | 16 | 内 |
| 10 | 14 | 12 | 15 | 直 |
| 11 | 16 | 13 | 11 | 直 |
| 12 | 20 | 19 | 9.5 | 直 |
| 13 | 20 | 12 | 10.5 | 直 |
| 14 | 16.5 | 15 | 22 | 内 |
| 15 | 16 | 15 | 14 | 直 |
| 16 | 19 | 19 | 10.5 | 直 |
| 17 | 14 | 13 | 12 | 直 |
| 18 | 13 | 12 | 6 | 直 |
| 19 | 14 | 11 | 8 | 直 |
| 20 ₁ | 58 | 44 | 13 | 直 |
| 20 ₂ | 128 | 85 | 20 | 直 |
| 20 ₃ | 18 | 12 | 7 | 直 |
| 21 | 15 | 14 | 16.5 | 直 |
| 22 | 14 | 12 | 20 | 内 |
| 23 | 28 | 26 | 12 | 直 |
| 24 | 27 | 21 | 9.5 | 内 |

(2) 第8号住居址

北東側は比較的保存が良いが、西南側はそれぞれ第7号・第9号住居址と切り合うため、確認が困難であつた。したがつてセクション(H-H')における層位状況により僅かにその痕跡をみとめるにとどまつた。推定規模は4.1m×3.8mの隅丸方形である。北東隅には明瞭な焼壁面がみとめられ、床直上60cm四方にわたつて炭化物の堆積がみとめられ、炉址と考えられる。その焼壁高は北東角で最も高く20cm~25cm、それからゆるやかな傾斜をもつて西側に40cm、北へ50cmほど延びる。壁高そのものはやや逆にのぼりながら、第7号住居址の北面壁に接合する。このため、第7号住居址に付属する屋外炉址の可能性も全くないとはいえない。たとえば炉址をコーナーとして延びる壁も、交叉の角度がやや開き気味で、竪穴式住居の一般的な平面形を考える時、多少の難があるようにも思われる。さらに第7号住居址が第8号住居址を切ると考える時、第8号住居址内のピットの位置、およびその数についても理解できない点がある。したがつて、ここでは第8号住居址の可能性を指摘するにとどめておきたい。

(3) 第9号住居址

第4トレンチの発掘中に確認されたもので西壁部の2.4mと北壁の4.6m東壁部の約2mが確認された。これから推定して1辺4.6~4.2mの隅丸方形の竪穴式住居と考えられる。南側のおよそ半ば以上が、流失したと考えられる。住居址内に計5個のピットが確認されている(挿図第8)。主柱

の位置として適当と考えられ、その間隔はそれぞれ2.4mと2.2mである。

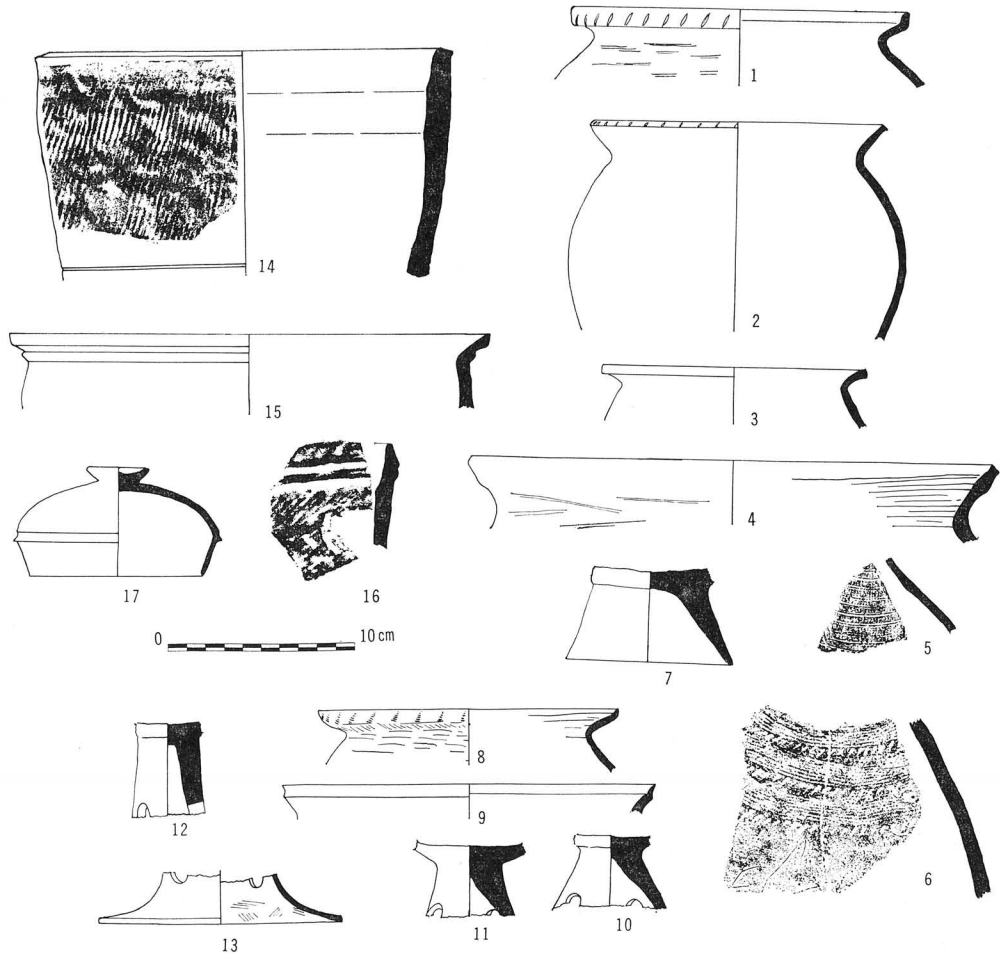
2. 第3区出土の遺物

3軒の建物跡の検出された第3区では、遺物としては土器と木炭が出土した。そのうち土器は表土層から住居址床面にいたるまで、さほど多量ではないが散在しており、すべてが細片で器形を復原するに足るものはほとんどなかった。また弥生式土器・土師器はきわめて軟弱で保存状況はきわめて悪い。さらに大部分が無文であった。出土の状況から住居址の年代決定の手がかりとなるもののみをとりあげた。

弥生式土器

第7号住居址の北西隅に近いあたりの床面に密着して弥生式土器が出土した。(挿図第10の5~6)回転台をゆるやかに廻しながら数条からなる櫛状器具で浅い沈線を付したもので、うち1片はさらにけて篋状器具による刺突文列が斜めにつけられている。いずれも壺形土器の肩部から胴部にかの破片である。また同様の刺突文は、甕形土器の口辺部にもみられる。(挿図第10の1~2)何れも弥生後期の特徴を示す資料であり、第7号住居址の年代を決定するものであろう。

また、第9号住居址では床面近くから高杯の脚部が数個体分出土したが、何れも3個の貫通する



挿図第10 第3区出土の遺物

円孔がうがたれ、その円孔部より折損していた。(挿図第10の10~13)また、口辺部に櫛状器具による列点文をもつ甕形土器(挿図第10の8)も伴出した。弥生後期のものである。

土師器と考えられるものは、何れも細片で床面に密着し、なお器形をうかがうに足る資料は見当たらなかった。しかし、絶対量は土師器が最も多く、破片に磨耗がみられるものが多いので、原位置にあったと思われるものは極めて少ない。

須恵器は第9号住居址の床面上約10cmから20cmにかけての地点から比較的多く出土したが、床面に密着したものはなかった。深鉢2個体と坏蓋1個体のほかは甕の胴部と細片である。深鉢は口辺部から頸部にかけてゆるやかな凸帯を有する。(挿図第10の14~17)

3. 小 結

第7号住居址の年代については、床面に密着して出土した土器から、三世後半のものと推定される。柱穴の対応は複雑で、一般の住居址に比してプランが小さく、いわゆる住居址を想定することは困難である。何か特別の用途をもつた建物ではなかろうか。多量に出土した木炭の中には、家屋の構造材を思わせるものも多かつた。太さは5cm~6cmを計測するが、中には年輪を数えることができるものもあり、炭化前の家屋の構造材として復原すると、収縮率を勘案して太さが7cm~8cm、10年生程度の丸太を使用したことになる。この太さは小規模なプランとも対応するものである。

第8号住居址は年代を決定するに足る資料は発見できなかった。大部分が他の住居址と切れ合ったり流失したりしており、わずかに北東隅から焼けた壁面に囲まれた焼固面が検出された。位置としてはあまり類例をみないが、炉址状遺構の一例として提示したい。

第9号住居址は出土した土器から弥生式後期、四世紀初頭のものと思われる。主柱はよく対応しており、住居址としてはよく整っているものの、南側約半分は削平されており、床面を失っているのは惜まれる。

(立松 宏・大下 武)

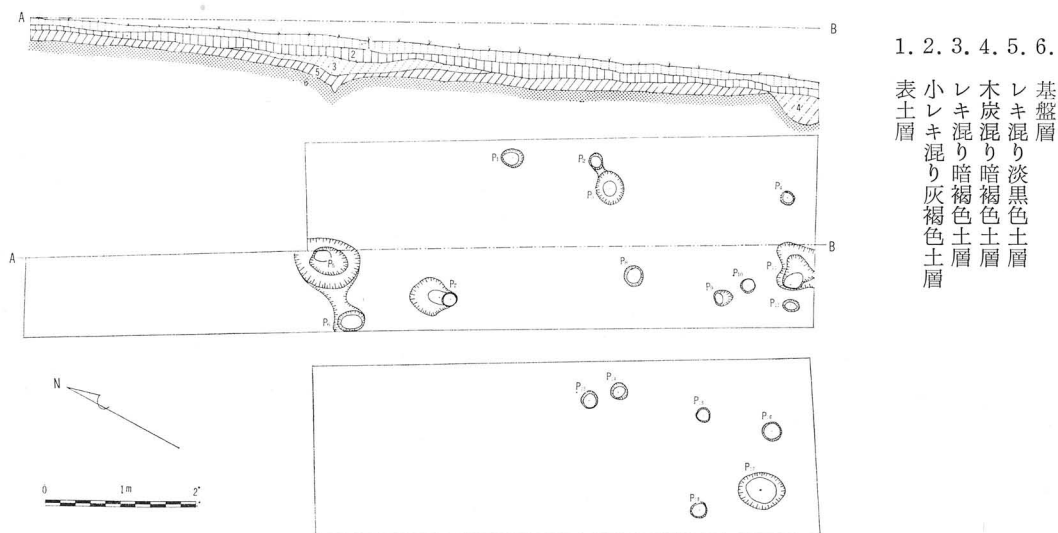
第六章 西方柱穴群の調査

1. 発掘の経過

第一次調査で発見された第2号住居址につづく西側に遺跡があるらしいことが予想されていたので、試掘Cトレンチと第2号住居址のほぼ中間に幅1mと長さ10mのトレンチを設け調査した。

耕作土層を取り除き灰褐色土層に入つても土器片はほとんど出土せず、20cmぐらい掘りさげた小礫（2cm以下が多い）混りの淡黒色土層になるあたりから土師器の破片が出土し始めた。淡黒色土層は20cm前後で、基盤らしい淡褐色の礫（5cm以下）混りの堅い層につきあたつた。

2層・3層とも区別が非常に困難な層であつたが、礫が3層になると大粒なものが多く混入している。中央部分に一部やや暗褐色を呈する層があつたが、堆積の時の状況によるものか、土器片の混入は2層程度で微量であつた。



1. 2. 3. 4. 5. 6.
 表土層
 小レキ混り
 灰褐色土層
 レキ混り
 暗褐色土層
 木炭混り
 暗褐色土層
 レキ混り
 淡黒色土層
 基盤
 混り
 淡黒色土層

挿図第11 西方柱穴群実測図

西方ピット群ピット寸法

| ピット番号 | 大きさ 短径×長径 | 深さ | 備考 | ピット番号 | 大きさ 短径×長径 | 深さ | 備考 | ピット番号 | 大きさ 短径×長径 | 深さ | 備考 |
|-------|--------------|----|------------------------|-------|------------------|----------|---------------|-------|--------------|----|----------------|
| 1 | 28×32 | 30 | 円形 | 7 | 外65×52 中22×22 | 16 23 | 甕1 | 13 | 22×22 | 41 | 土師器小片2出土 |
| 2 | 20×20 | 15 | 2,3は上部 がつなが っている | 8 | 21×20 | 22 | 小石2こ | 14 | 26×26 | 50 | 土師器小片1 まつすぐ |
| 3 | 38×38 | 23 | | 9 | 24×22 | 15 | P6に向つ て斜方向 | 15 | 21×21 | 22 | |
| 4 | 20×20 | 50 | まつすぐで 一番深い | 10 | 20×20 | 21 | | 16 | 28×28 | 26 | 淡黒色土層 のつづき |
| 5 | 83×55 | 35 | 途中側面に 土錘1 | 11 | 外38×38 | 23 | 土器多量 出土 | 17 | 65×54 | 24 | 〃 |
| 6 | 34×31 | 35 | | 12 | 20×15 | 18 | | 18 | 25×22 | 28 | 〃 土師器片1 |

おなじ淡黒色土層でも中央から南に土器の混入が多く、P₅・P₆を結ぶ溝状のくぼみから北側は、基盤面も次第に浅くなり、土器の混入も目立つて少なくなっている。

溝状のくぼみがやや円弧をえがいていることや南寄りにピットや土器の多いことなどから、溝より南に向つて東側を幅1.5mと西側を幅2.5mほど拡張した。

西側拡張部分 灰褐色土層を10cmぐらい掘り進んだ南寄りの一帯から、土師器の破片2,3個体分が出土した。この層にも生活面が予想されたので慎重に掘り進めたが、間もなく淡黒色土層となり、ピット群は淡黒色土になつて明確にあらわれ第2次生活面の確証を得ることはできなかつた。

西側も南寄りに土器の混入が多く、ピットも集まつている。

東側拡張部分 東側も南寄りに土器やピットが集まつて出現した。とくに須恵器の甕と思われる文様のある破片や蓋坏の破片、さらに土師器の軟らくほとんど土に化したような破片が他のところより比較的多く出土した。

全体に南寄りに土器やピットが集まつているので、時間の許す限り約1mほど拡張した。

南端のほぼ中央に大きなピット(P₁₂)があらわれ、木炭を少し含む土の中に土師器(甌・甕)須恵器(蓋坏)がそれぞれ数個体分出土した。

時間的にここまでで発掘を中止せざるをえなくなり、住居址であるかどうか明確にならないまま実測図に現状を収めて発掘を終了した。

2. 遺 構

全体に南寄りに土器やピットが集まり、遺跡は南側、さらに未発掘の方へ延びているものと考えられる。

中央の溝状の遺溝は、東にも西にも延長している様子はみられず周溝とは考えられないが、この地点から北にかけて基盤面の傾斜がやや大きくなること、土器も少なく、ピットもみられないことなどから、何らかの境界であることが想像される。

耕作面が全体に南に傾斜しているのに対して、基盤面の南端からP₁・P₇の線まではやや平坦であり、土器の出土状況からも生活面と考えることはできる。

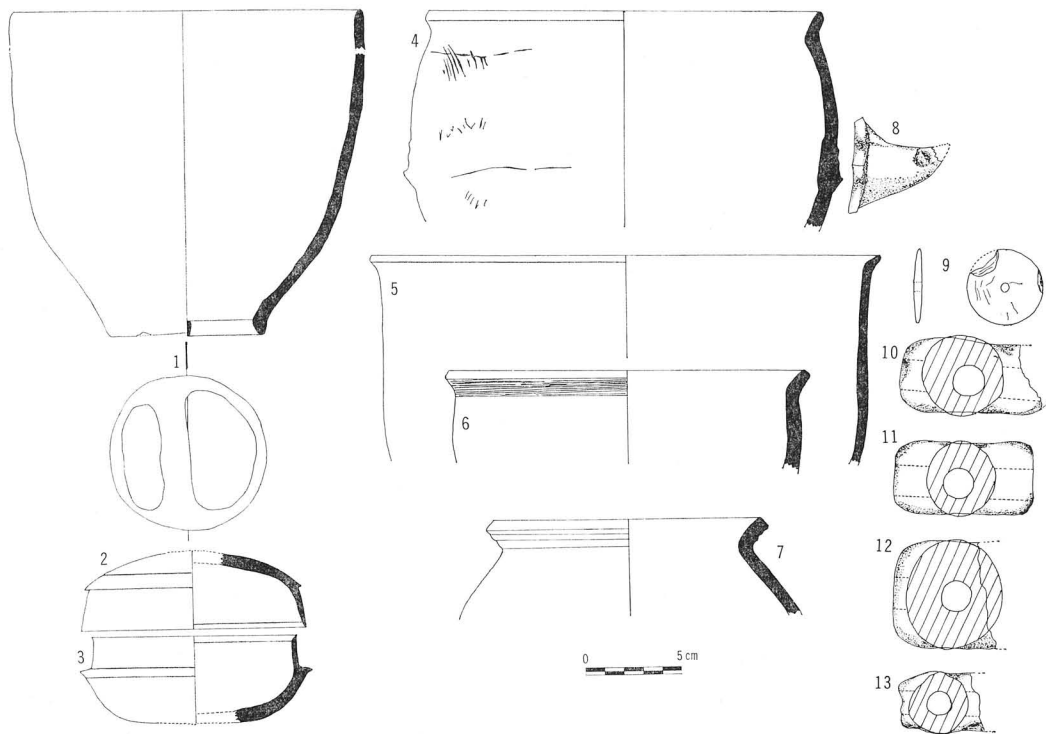
ピットは11図の様に大小18か所を数えるが現状ではそれらに関係づけることは困難である。その寸法などについては附表の通りである。

3. 出土遺物

おもな土器の出土状況は下表の通りである。

| | 土 師 器 | 須 恵 器 | そ の 他 |
|----------|--|--------------------------------|-----------------|
| 拡張東側部分 | 土錘 4 甕の台部 2 甕の口縁部片 4片 | 蓋坏口縁部 12片 甕(文様)片 1片 | |
| トレンチ中央部分 | 土錘 4 甌 完 1 甌部分片 2 片把手 1 甕の底部 1片 甕の口縁部 1片 | 蓋坏口縁部片 8片 甕(文様)片 5片 把手 1 | |
| 拡張西側部分 | 甌・甕口縁部 7片 | 蓋坏口縁部 12片 高坏脚部 1片 甕(文様)片 2片 | 紡錘車 1 (緑泥片岩) |

12図の1甌はP₇からほとんど完形のまま出土した。かなり使用されたものらしく底部などかなりの磨耗が見られる。作りはかなり薄手であるが、底部は整つた円形であるのに全体は不均衡の楕



挿図第12 西方柱穴群出土の遺物

円であり、仕上げはあまり丁寧とはいえない。甑は薄手のものが多いようであるが、挿図第12の4のように厚手で把手もあり丁寧に仕上げられているものもある。いずれも4世紀後葉から5世紀前葉にかけてのもので第2号住居址時代の考察と符合する。

土鍾は挿図第12の10~12のように形・大きさが酷似している。挿図第12の13はやや小形で凹凸が多く粗雑な作りであるが、穴はどれも整った円形で直径も大差がない。

須恵器は蓋坏がほとんどである。挿図第12の2・3はP₁₂より出土したもので、肉厚で稜がすどく突き出し蓋部は口縁部が外側に開き胴部に線刻がある。坏部は口縁部が内側に入り込んでいいる。いずれも古墳時代の第一形式に属するもので、5世紀後葉はくだらないものと思われる。

須恵器の多くは、土師器と混つて出土したことから同時代に使われたものと思われる。

唯一の石製品は緑泥片岩でつくられた紡錘車（挿図第12の9）であり、西側の第3層から出土した。よく整った円形で表面はよく磨かれている。

4. 小 結

発掘が未完で確証を得ることは困難であるが、出土品から想像すると、4世紀後葉から5世紀中葉にかけてのものであり、出土状況が土師器に須恵器が混つて出土することから、第2号住居址とはほぼ同時代の5世紀前葉ごろのものと考えられる。

柱穴から建物を想像することは困難であるが、土器の考察でのべたように生産に使用したものや生活上の煮沸器具が比較的多いこと。さらに紡錘車の出土などから、第2号住居址の付属建物で生産用具を格納したり、生活用の屋外炊事場のような簡単な建物があつたであろうか。いずれ第三次の発掘調査がおこなわれ、さらに南へ拡張などされればこれらの関係は明白になるものと思う。

（長谷川昭二）

第七章 総括

1

カブト山古墳の西南方向に立地したカブト遺跡に対し、昭和47年の秋から年末にわたった第一次調査につき、昭和48年の8月に実施した第二次調査により、遺跡の範囲・住居址の所在さらに各住居址の構造・年代など、その大要を概括することができた。

遺跡集落の存在する範囲についてのべてみると、北西は天白川南岸丘陵として古い歴史をもつ急な崖面となっており、西南方向の限界については、試掘した5本のトレンチの中で、第2号住居址より約20mのところを設定をしたbトレンチの中に溝状の遺構がみられ、両側のa・c両トレンチと対比した観察から、遺跡の限界であることを知った。南から東にかけては緩やかな斜面となっており、試掘トレンチのd・eを設定したのであるが、南東端ではすでに古代の地表面が流失しているのを知ったのである。しかし遺跡の前面にみられる侵蝕谷の状態から、試掘トレンチの限度をこえていないと考えた。ただ遺跡の北東の部分については、第二章遺跡の由来でのべたようにカブト山古墳の破壊を別としても、ここ十数年の間に土取りされてしまったものであつて、今にしておもえば一連の住居址がひろがっていたと推定されるのであろうが、誠に遺憾なことをしてしまつたと惜まれるのである。

カブト山遺跡周辺の古代地形の中で、とくに指摘されるのは湧水のである地点が数か所みられることである。とりわけ三ツ屋第1号墳の麓で知られるものは有名であるが、こうした谷底までくだらなくても、カブト山遺跡のすぐ下にあたる丘の中腹にも発見されている。カブト山遺跡が立地している台地の地層が第三紀の鮮新世であり、粘土層が幾層にもかさなつて不透水層を形成していることからでも理解されるところである。

2

カブト山遺跡の調査をおわり、多くの量の出土品をえたのであるが、ほとんどの例が器形の復元に困難なほど、こまかく破損していた。

特殊なものとしては、単独出土の形で縄文晩期の精製土器が一片だけ採集されている。大洞C1というところであらうか。

出土遺物の大部分のものは、弥生式土器や土師器であり、東海地方や知多半島における編年で、弥生後期の寄道式土器から欠山式土器につづいて、古式土師器の王江式土器さらに青山式土器にいたるものである。

弥生式土器の中で、寄道式に編年される土器は弥生後期の前葉にあたるもので、豊橋市瓜郷遺跡の上層貝層出土の土器を標式としている。寄道式はさらに新古の2時期にわけられており、カブト山遺跡で検出されるものは寄道式の新しい時期にあたり、住居址でいえば第7号・第8号の住居址がこの時期である。年代は3世紀の後半とされている。

つづく欠山式土器は、弥生後期の後葉にあたり、愛知県宝飯郡小坂井町の欠山遺跡の出土土器を標式としており、渡辺直経氏による住居址内の炉床面を試料とした熱残留地磁気の測定から、4世紀初頭と年代比定がされたものである。寄道式土器の文様を簡略にした装飾がのこっている例もあるが、大多数のものは無文となつている。カブト山遺跡で調査された住居址では第9号住居址がこれであり、第1号住居址もこの時期にはじまつていて、弥生文化終末の欠山式土器に古式の土師器が伴出する時期といつた方が適切かも知れない。

古墳時代は4世紀中葉からはじまつており、土師器の第1期に比定される古墳時代前期の土器は、愛知県高浜市の王江遺跡の土器を標式として王江式土器とよんでいる。王江式の時期にはまだ須恵器は出現していない。カブト山古墳はこの時期の後葉に築造されたものであり、カブト山遺跡の住居址では第6号住居址がこれである。第2号や第3号住居址もこの時期の終末にはじまつている。

土師器の第2期は青山式土器とよばれ、愛知県渥美郡渥美町の青山貝塚の土器を標式としており、古墳時代の中期に比定されている。青山式の初期には須恵器がまだあらわれていないようであるが、やがて古式の須恵器が伴出するようになる。カブト山遺跡で検出した住居址では、第2号・第3号・第4号・第5号の住居址がこの時期のものである。

3

カブト山遺跡では、第一次調査で検出した2戸を加えて9戸の住居址を発見している。各住居址の規模や編年を表にしてみると次のようである。

| No. | 規 SN(m) | 横 EW(m) | 床 面 形 | 編 年 |
|-----|-------------|------------|-------------|--------------|
| 1 | 5.0 | | 隅丸 | 弥生末 (欠山—王江式) |
| 2 | 5.6×6.6 | | 隅丸長方形 | 古墳中 (青山式初) |
| 3 | 3.8×4.0 | | 隅丸方形 | 古墳中 (青山式初) |
| 4 | | | | 古墳中 (青山式末) |
| 5 | 5.0×6.0(推定) | | 隅丸長方形 | 古墳中 (青山式) |
| 6 | 3.2×3.6 | | 隅丸方形 | 古墳前 (王江式) |
| 7 | 3.2×4.2 | | 隅丸長方形 | 弥生後 (寄道式) |
| 8 | 3.8×4.1(推定) | | 隅丸方形 | 弥生後 (推定) |
| 9 | 4.2×4.6 | | 隅丸方形 | 弥生後 (欠山式) |

そして第5号住居址が平地式住居であつたほかは、いずれも竪穴式住居であつた。

全掘できなかつた第1号と第4号の住居址をのぞき、弥生時代の第7号・第8号・第9号の3戸はいずれも一辺が4m程度という、平均した床面規模をもつていておよそ一定であるのに対し、古墳時代前・中期の4戸は、第2号と第5号の住居址が一辺の長さ5m～6mという大形の規模をもつているのに、第3号と第6号の住居址は一辺の長さが3m台という小形の規模であるというように、床面の規模に大小の差が目立っている。住居址の規模の大小は、かならずしもその家族の勢力の強弱や貧富の差を示すものでなく、居住した家族の人数とも関係があつたり、たとえば若者小屋のようにムラの人々が集会するための共同体施設であつたかも知れない。

そして第2号住居址の西南方にある戸口の前面には、数多くのピット群が発見されている。第2号住居址を調査した第一次調査のおりにも、遺構の存在を推定したのであるが、発掘区を設定してみても具体的にとりあげる性格を確認できなかつた。今のところ第2号住居址に付属した倉庫とか垣根のような屋外施設があつたとするにとどめたい。石製の紡錘車や大形の網おもり、さらに数点の甗がかたまつて検出されるなど、それを裏付けるものではなかろうか。ともあれ第2発掘区との間に掘りのこした区域を調査する機会があれば解決される問題である。

4

住居址内部の構造については、とくに第一次調査の時の第2号住居址で顕著な内容が指摘された。すなわち梁木^{はりぎ}をくんでいいる4本の柱のほかに、住居への出入口を示す戸口が、門先の2本とともに

内部に付属して、さらに2本の柱を配して仕組んであつた。住居の壁よりには貯蔵穴が用意されており、貯蔵穴の前には2本の柱をならべて立てていた。^{ついで}衝立形の施設が考えられよう。おなじような柱組は奥の主柱と炉址との間にもみられ、この場合は棚とか乾燥を目的とした組木とも想定されるが、貯蔵穴の前の柱とともに住居地の内部がすでに用途や機能によつて部居割する分室の意図の萌芽とも指摘される。第2号住居地の炉址は特別に大きなものであり、底面が割合に平坦でやわらかいこともあつて、生活用というより集会用であるとか、魚や肉を刺した串をならべるような用法が考えられた。一方、堅穴の外側には屋根の^{たるき}垂木の先端をうめこんだと思われる斜方向の穴が20cmの間隔で検出されている。

こうした内容と共通する問題については、他の住居地においても、個々の具体性をもつて知られている。

すなわち第3号住居地にみられる4本の主柱は、それぞれ3～5個のピット群で構成されている。しかし各ピット群の中には1本ずつは40cmをこす深さをもつ穴が存在し、主柱の穴であることを示している。貯蔵穴は第2号のほかには第3号・第6号の住居地からもみとめられた。

戸口の構造では、第6号住居地の床面に特色があり、周溝の部分に数個の丸石をならべ、それを取りまく外側には土堤をきずき、住居地内部への浸水を防ぐ装置をそなえていた。また炉址としては第8号住居地のそれが特殊なもので、住居地の北東隅を利用しており、かたい焼固面をもつていた。一方、第7号住居地にみられる柱の構造も特別のもので、床面の四方の隅から検出された柱穴がいずれも内傾してほられていた。この住居地は焼失により放棄されたものとされているが、柱材と考えられる丸太の炭化物が多数みられた。測定の結果は7～8cmの径をもつた10年生程度のものと推定された。

(杉崎 章)

付載一 第一次調査の住居址

1. 第1号住居址

住居址は工事によつて東半分が壊滅し原形を確知し得ない。隅丸方形になるのか隅丸長方形になるものとも判然としないが、残存部からみれば、主軸を北北西30度にとつた竪穴式住居址である。

壁面は北壁および西壁の一部と、その壁面下に幅約10cm、深さ約4cmの周溝が一部遺存しており、地山から約40cmほど掘りこまれて床面があつた。床面は小礫を多く混えた褐色土層であり、そのままは使用しにくい状態であることから、床面上に雑草や稲わらを敷いていたものと考えられる。床面には大小各種の形状をなした11か所のピットがあつた。

中でも北壁に平行して一直線上に並んだ4か所のピットは、中にはさまれた2か所のピットが深く掘られて主柱穴的な役割を果たしているようであり、その両側の2か所は浅くうがたれていた。柱は隣接していても同一の長さであつたり、同一の役目を持つたものとは限らず、補柱の役目や助梁の役目等や間敷切り状の施設、部分的な高床も考えられよう。普遍的にみられる主柱穴のあり方に比較すれば、本例は通常みられる構造と異なる構築と用途をもつていたと考えられるが、全体が検出されない以上推定の域を越えないであろう。

残存した床面の中央にみられる3か所の浅いピットの中とその周辺には、多量の炭化物がみられ、炉址と考えられる。

西方には南北方向に80cm、幅12cmの浅い溝と、長径110cm、短径85cm、深さ29cmの長方形のプランをもつた凹状のピットがあつた。その底面は、床面のように踏み固められた痕跡はなかつた。

このピットに接してピットが1か所と幅約60cmの浅い溝が住居址外へと広がっていた。方形状のピットは、整えられている形状から特殊な用途や機能が考えられる。

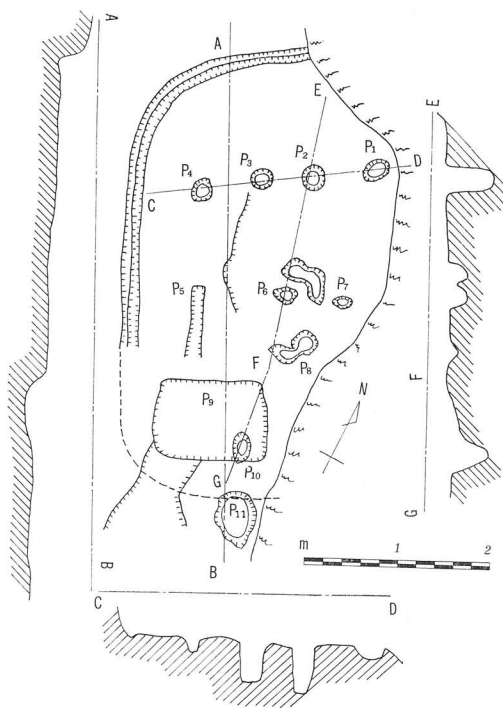
出土遺物

第1号住居址の床面出土の遺物は、土器および石器であつた。遺物は住居址内に散在していたが、量も少なく細片が多い。石器は凹石1点である。

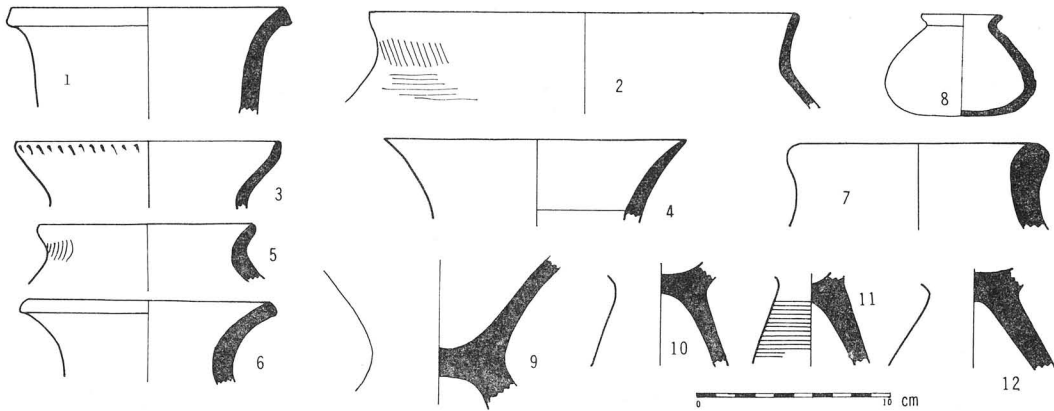
弥生式土器は、壺形土器、台付甕形土器、高坏形土器等で、弥生時代後期末の欠山式に類するものである。いずれも器面が美しく研磨されて焼成も堅緻である。

なかでも小形の巾着型をした袋状の土器は、最大胴径が下腹部にあつて、内外面ともに丹彩が塗られていた。これは尾張地方出土のパレススタイルとよばれる着彩の土器の影響を受けたとみられる異形小形土器で祭祀に用いられたと考えられる。

古式土師器では、王江式に類する、厚手の複合口縁をもつた壺形土器、坏部の口縁部が外反りで



挿図第13 第1号住居址実測図



挿図第14 第1号住居址出土の遺物

浅く、脚端の裾がラツパ状に開く高坏形土器、小形の丸底形の壺形土器等がみられる。

須恵器は蓋坏の坏身が1点で古墳時代須恵器の第一型式に類するものとみられる。

第1号住居址は弥生時代最末期か土師器発生の時期に営なまれたものと考えられる。

2. 第2号住居址

第2号住居址は、第1号住居址と方位を同じくし、約5mを隔てて築営された南北5.6m、東西6.6mの規模をもつ隅丸長方形の住居址である。

壁面は、北壁全面と東壁の北の部分約1/3遺存し、他は後世の耕作によつて壊されていた。壁面の直下には、幅約10cm、深さ約4cmの周溝が東北隅から西と南へのびたものと、西南隅から北と東へのびるものの一部がみられた。

床面は、地山を約40cm掘り下げて設定され小礫を多く含んだ褐色土層であつた。床面は生活面と堆積層との剝離が困難な状態であつたが、総計24か所のピットを検出できた。

住居を構成する支柱は4本あつたと考えられ、柱穴はそれぞれ対応する位置にあつて、屋根は地表面まで葺きおろしたようである。特に西壁上面の2か所に垂木を埋めこんだと思われる傾斜角をもつたピットが、約20cmの間隔をおいてみられた。西北端の壁面上の角には径約40cm、深さ約15cmのピットがあつて、中には炭化物が認められた。

住居址の南端には、孔径の小さいピットが2か所と、それに附随する2か所の柱穴があつて、床面や位置、周辺の状態から出入口の施設があつたと考えられる。

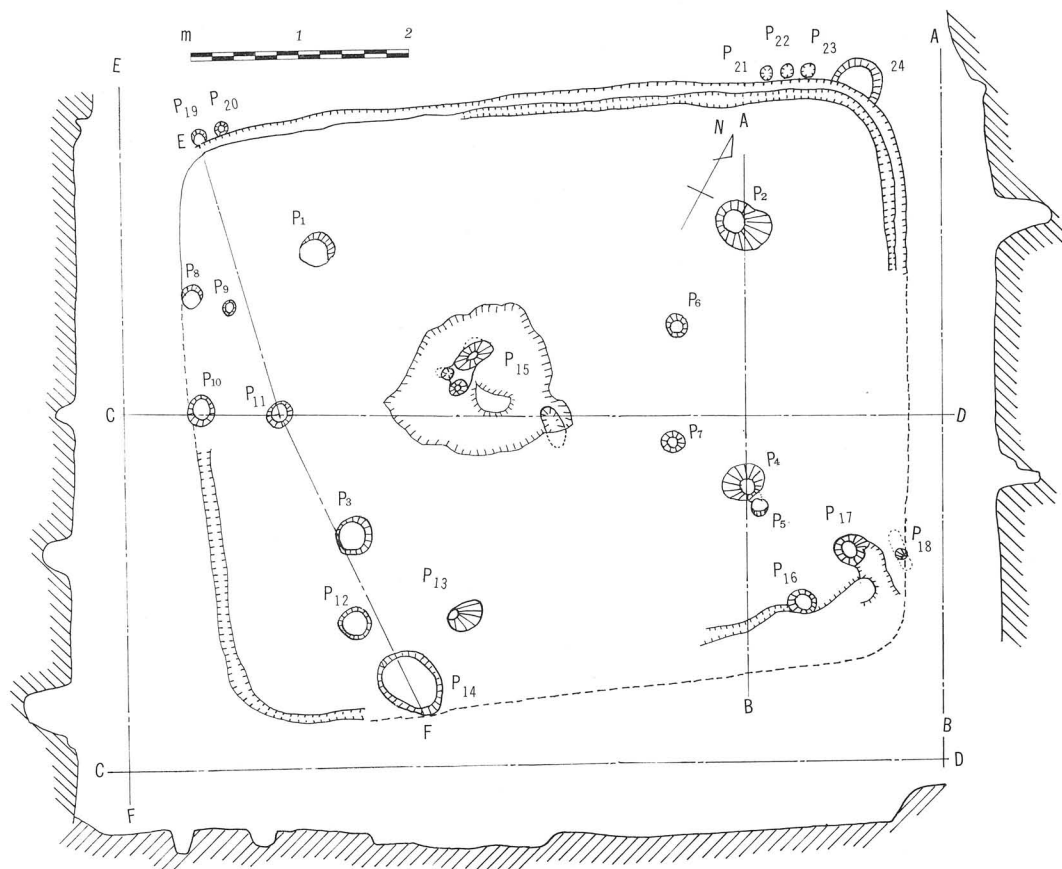
東壁の南寄りには壁に接した貯蔵穴があつて、その近くに2か所のピットが、貯蔵穴から等間隔の位置にうがたれていた。貯蔵穴に関連する機能を有するものとも推定できよう。

住居址の中央から東寄りに2か所の細い柱穴がみられるが、この小ピットは支柱にあたかも対応するかのようにはほぼ同じ位置にある。ピットの傾斜角から柱は直立していたものようで、支柱に対する補柱ではなく、特別な用途をもつ組木や棚状の施設を設けたとも考えられる。

ほぼ中央にある炉址は、大形不整形をなしたものであり、底面中央に4か所のピットがあつた。炉内には炭化物が比較的少なく、凹凸が多く、炉址面が軟弱なことから、煮沸の外に保温や特別な作業の用に供したとも考えられる。

出土遺物

出土した遺物は、細片が多く、形態を充分知り足るものは少量であつた。出土土器は壺形土

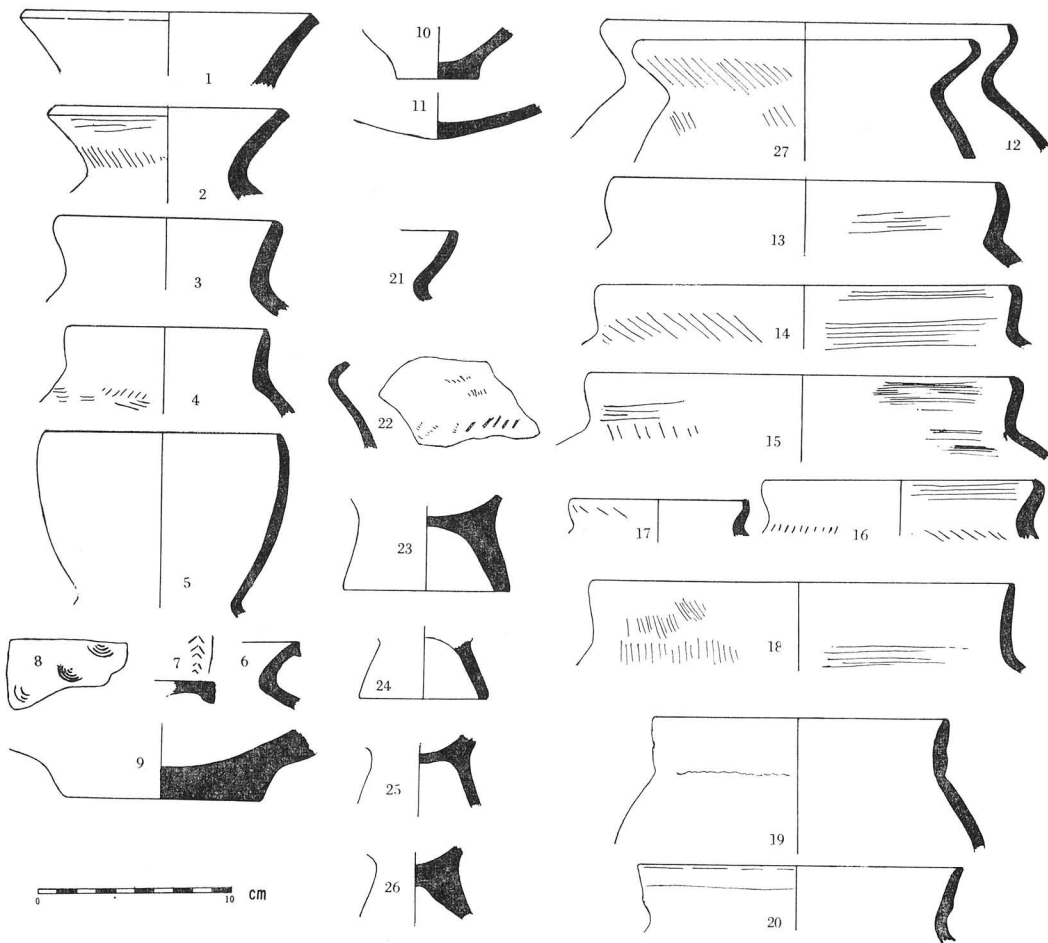


挿図第15 第2号住居址実測図

器、甕形土器、小鉢形土器、高坏形土器等がみられる。壺形土器では、尾張一帯に普遍的にみられる丹塗の土器がみられる。これは広口壺の口縁部で、口端の凹線や口縁部内側上面に羽状文や扇状文を施したもので、弥生式後期の寄道式土器の伝統を強く残すものや、柳が坪形の土器、S字状の口縁をもつ甕形土器の祖型とみられるものや、S字状の口縁部をもつ甕で縁のややくずれたもの、不明確ではあるが、複合口縁らしく口縁部外面に、わずかな稜をみるもの、小形丸底の壺形土器等である。

これらは、いずれも粘土が緻密でよく精選されており、弥生式後期から文様が失なわれはじめて無文化したり、土器の底部が丸底化したり、複合口縁の甕形土器や、口縁部に隆帯をもつ畿内的な様相を示すものなど、先行型式の伝統を強く残しながら土師器の初現をみ、さらに発展していく過渡的な様相をうかがうことができる。第2号住居址は土師器の編年で尾張・三河地方の青山式土器に対比できるようであるが、王江式に近い様相もみられることから、古墳時代前期後半か中期初頭に比定されるものと思われる。

第1・第2号住居址とも、絶対年代を3～4世紀にもとめられ、いわゆるカプト山古墳の年代である。いざいざカプト山遺跡はカプト山古墳の被葬者の支配した中心集落であり、生前において生活していた集落かも知れない。もとよりカプト山古墳は前期古墳であり、その支配する勢力範囲は、眼の前の遺跡に欠下遺跡を加えたようなものでなく、アユチ瀉の周辺の一帯を主軸とした名古屋南部一円であろう。



挿図第16 第2号住居址出土の遺物

第1号住居址は、全面を調査することができなかつたので性格をのべるわけにいかないが、第2号住居址は規模や構造とも大きく特色をもっている。周辺地域の住居址を調査すれば、その性格すなわち集落の中でしめる意味についても、さらに具体的となるであろう。

(宮川 芳照)

付載二 天白川南岸段丘の遺跡

1

カブト山遺跡やカブト山古墳のある支丘を西の端として、東の方へ三ツ屋の支丘、斉山の独立丘陵、さらに氷上山といつて延喜式内の氷上姉子神社の裏山につづき、その東は中世末に大高城のあった丘へつらなる一連の丘陵は、ところどころ小さい侵蝕谷によつて切れているが、いわゆる天白川南岸の段丘として把握することができる。高さは30m程度の低い丘陵であり、カブト山や三ツ屋の支丘は東海市名和町に属しているが、斉山から東は名古屋市緑区の大高町の地籍である。

東海地方における氷河時代の海岸線は、渥美半島の南方約20km付近にある遠州灘の沖合にあり、伊勢湾それ自体は木曾川の河岸段丘であつたといわれる。現在の伊勢湾の海底には、約1万年前のころの地形が埋没谷としてのこつており、地下約50mの深さをみせている。

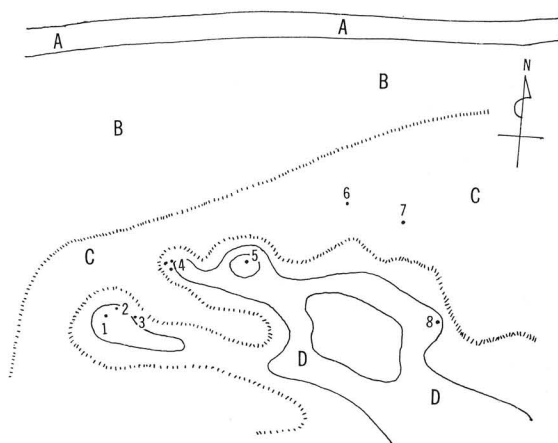
主谷である木曾川の埋没谷に対し、天白川の谷は支谷の形で流れこんでおり、規模は小さくて浅いがおなじく氷河時代の地形をあらわす埋没支谷が存在している。天白川の埋没谷の深さは、現在の河口から約1km上流である千鳥橋付近で-22m内外の深さをもつており、それから約2km下流の九号地東側の海底では-26~-27mの深度をもち、そこからさらに約4km下流にあたる名古屋港西突堤の南端付近では-29~-30mの深度があり、氷河時代における天白川下流の埋没谷の地盤勾配をうかがうことができる。(注1)

氷河時代の終末とともに海面はいちじるしく上昇してくるようになり、縄文文化早期の中葉から後葉にかけては、さらに急速な海面上昇がみられ、約4500年前と推定される縄文中期のころには現在の海面より数m高位になつている(注2)。天白川中流の名古屋市緑区鳴海町にみられる縄文早期末の上の山貝塚とか、前期の鉢の木貝塚や大根貝塚などの位置は当時の海進を示している。

いま東海市名和町から名古屋市緑区大高へ通ずる旧県道の北側にみられる約2mの落差をもつ崖面は、この時の海蝕面に比定されよう。

ここより下の面は長い年月にわたりアユチ潟といわれた地域であり、浅海底の地帯であるとともに、天白川下流の氾濫原となつていたところである。

現在の天白川南岸の地形を大観してみると、近世になつて干拓地として開拓されるまで農耕地とならなかつた旧アユチ潟と、さききのべた丘陵面、そして両者にはさまれた低位の洪積段丘面の3地域に大別することができる。そして原始・古代の時代において、生活の場を提供していたのは、低位段丘面と丘陵面である。



挿図第17 天白川南岸の地形と原始・古代遺跡

- A 天白川 B 旧アユチ潟(氾濫原) C 洪積低位段丘
D 丘陵
1. カブト山遺跡 2. カブト山古墳 3. 欠下遺跡
4. 三ツ屋古墳 5. 斉山古墳(貝塚) 6. 菩薩遺跡
7. 氷上姉子神社 8. 大高廃寺

2

カブト山から数百m東へはなれた斉山の独立丘の付近は、急な崖をなして、これまで土取りや樹木の伐採がさけられてきたのであるが、ここ数年の間に宅地造成がすすみ、地表面が露頭してくるとともに、小貝塚が数か所にわたり発見されてきた。なかでも斉善稻荷の境内の貝塚からは、縄文晩期終末期の土器が発見されている。天白川南岸地域における最初の住民である。(注3)

この時期につづいて斉山の小貝塚の中からも発見されている弥生土器は、カブト山遺跡からも一括資料の形で検出されてきた。この地域における第二の時期の住民であり、東海地方の弥生後期の文化で、寄道式から欠山式につづく時期であり、3世紀の後半から4世紀の初頭のころである。この時代の土地利用は、初期の水田農耕であるが、カブト山と三ツ屋の間の谷など深くきざんだ侵蝕谷の谷頭部をはじめとし、この地域にみられる規模の小さい谷には湧水地点が多く、随所に淡水の沼がみられていて、2~3戸単位の小集落にわかれて生活がはじめられたものと考えられる。

そして丘陵の裾と旧アユチ瀧にはさまれた低位の洪積段丘面が、全面的に水田として利用されるようになるのは古墳時代に入った4世紀の中葉以後のことである。弥生時代の農業が自然灌漑の可能な局地的な地域にかぎられているのに対し、古墳時代の農業は灌漑技術の進歩により、乾燥した土地をも農耕地として水田農耕に利用することに成功したものである。このことは弥生時代の農耕地が、現在も地表面下に黒泥土の堆積みをとめることができるような過湿地であり、特別の灌漑技術を必要としないかわりに、土地の有機分を栄養源として十分に利用できず、生産力としては低劣をまぬがれない弱さがあつた。ところが治水技術の進歩や農具の改良により、乾燥した土地を農耕地として利用できるようになると、面積の拡大とともに地力の質的な高度化が加わり、土地の生産力は飛躍的な増大があつたわけである。

遺跡の規模も必然的に大形化してくる。

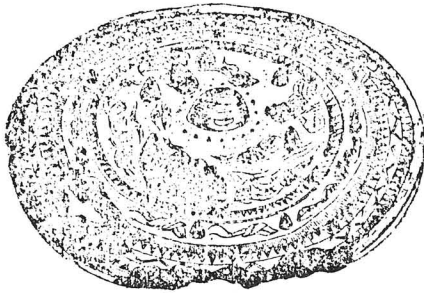
カブト山遺跡は、このころのものであるが、中央にカブト山古墳をはきんで東北の傾斜面にあたる崖錐状の地形に立地した欠下遺跡も同時期であり、古式の台付甕形土器やたくじりをはじめ、佻形をした土師器の碌などがみられる。土取り工事などで古い地表面の変化した現状では追求することはできないが、もともと欠下遺跡もカブト山遺跡群に包括されていたのではないかと推定することができる。

カブト山遺跡や欠下遺跡とほとんど同時期と推定される遺跡が、さらに1か所、カブト山から北東へ1km近くもはなれた名古屋市緑区大高町との境界面につづいて存在している。いまだ調査されていないが菩薩遺跡と仮称されているもので、相当の広範囲にわたり土師器や須恵器の散布がみられるものであり、古い伝説にいろどられる氷上邑の中で、ヤマトタケルノミコトが滞在の夜、砂をかむ海波の音に目をさまされたという故事にちなんだ寝覚の里の碑も、遺跡の一角にたてられている。遺跡は未調査であるが4~5世紀における尾張氏の居館址の集落に推定されるものかも知れない。(注4)

3

こうした遺跡環境の中で出現したのがカブト山古墳である。4世紀の中葉のころ大和朝廷は、大和における政権が確立すると間髪を入れず、諸豪族の勢力を結集して東国の征服にのりだしてきた。大和王朝はその支配区域には行政単位としてアガタ(県)を設置したといわれ、アガタの所在は大和政権の支配下に入ったことを示す裏付けでもあつた。アガタの分布からみると尾張国は初期の大和朝廷における東の勢力限界を示している。記録にのこるアガタの東限として尾張国のニワ県(天孫本紀)やアユチ県(熱田縁起)さらに島田上下県(和名抄)などが知られている。

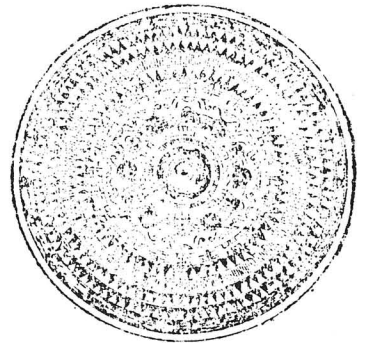
1 三神三獸鏡
直徑 七寸五分



2 振形紋鏡
徑 三寸一分



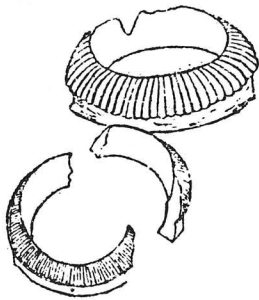
3 六神鏡
徑 五寸五分



4 古鏡破片
徑 三寸七分



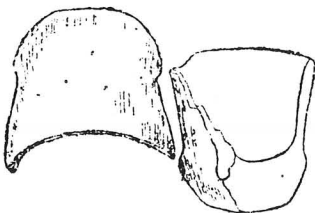
5 石 釧
内法直徑 二寸内外



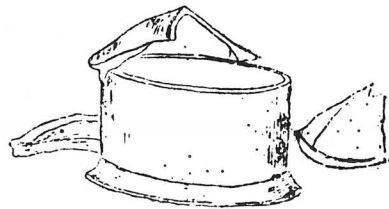
6 管 玉
徑二分二厘-長八分- 一個
徑二分 -長一寸二分- 一個
徑二分 -長一寸 - 一個
徑二分 -長 八分- 一個
徑二分 -長 四分- 一個
徑一分二厘-長 八分- 二個



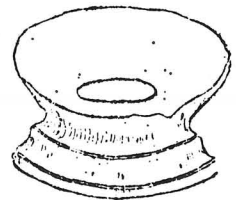
7 石 器
高、徑各約二寸六分



8 石 器
高 一寸八分、徑 三寸



9 石 器
口徑 三寸四分



挿図第18 カブト山古墳出土の遺物 (明治14年模写)

カブト山古墳は、明治13年11月20日に地主の小島松助父子によつて発掘され、粘土槨の中に朱をつめた層があり、その中に4面の鏡や管玉144個、石釧9個をはじめ、石製模造品の合子・埴・器台が発見されている。(注5) 現在、東京博物館におさめられている石製模造品のほかは、三神三獸鏡・振形紋鏡・六神鏡をはじめ玉類の行方が不明で、資料としては明治14年の模写しかのこっていないのは惜しまれている。

私たちは昭和48年8月、犬山市において尾張地方で最古といわれる白山平古墳の調査事業に従事する機会をえたのであるが、竪穴式石室の下底部に割竹形の粘土床が設けてあつた。四壁とも赤色顔料が美しく塗られており、一方、粘土床の被葬者を安置した部分には特別な赤色顔料が厚く層をなしてあやしく輝いていて、その中に数々の装身具がうずめられていた。すなわち石室の東壁にそつて10面の鏡がならべられ、それから1mへだてた粘土床面には、碧玉製の鍬形石1個・車輪石1個・石釧と合子2個・鏡1面と小形の管玉190個が1群となつて検出され、その西方につづいてヒスイ製の勾玉3個・碧玉製管玉40個が発見された。11面の鏡の型式をのべると三角縁神獸鏡5面の中で、吾作銘重列二神二獸鏡・天王日月唐草文帯二神二獸鏡・唐草文帯二神二獸鏡・波文帯三神三獸鏡の4面は、中国からの舶載鏡であり、もう1面の波文帯三神三獸鏡は踏返し鏡とも考えられている。そして平縁鏡6面は、変形獸文縁方格規矩四神鏡と変形三獸鏡さらに4面の変形四獸鏡であるが、6面ともいづれも白銅の仿製鏡であつた。

前期古墳の中でも、発生期にあたる古式の古墳は、三角縁神獸鏡と若干の鉄製品のみを副葬し、玉類とか碧玉製の腕輪類をもたないものとされていることからいえば、白山平古墳の年代は4世紀後葉にくだと比定され、大和王朝の勢力が木曾川をこえて尾張国まで畿内勢力圏の中へ統一されてきた時期を示唆している。

カブト山古墳の年代は、大和朝廷の勢力が尾張国を橋頭保として、さらに東へのびようとする時期にあたり、犬山市の白山平古墳の築造につづく4世紀終末に比定されている。三神三獸鏡を出土したカブト山古墳の被葬者は、畿内勢力圏の最末端の首長として祭祀はもとより政治的支配権にぎり、さらに東方へ大和王朝が征服の軍をすすめる時には、一方の軍司令官の役割をになつたものであろう。

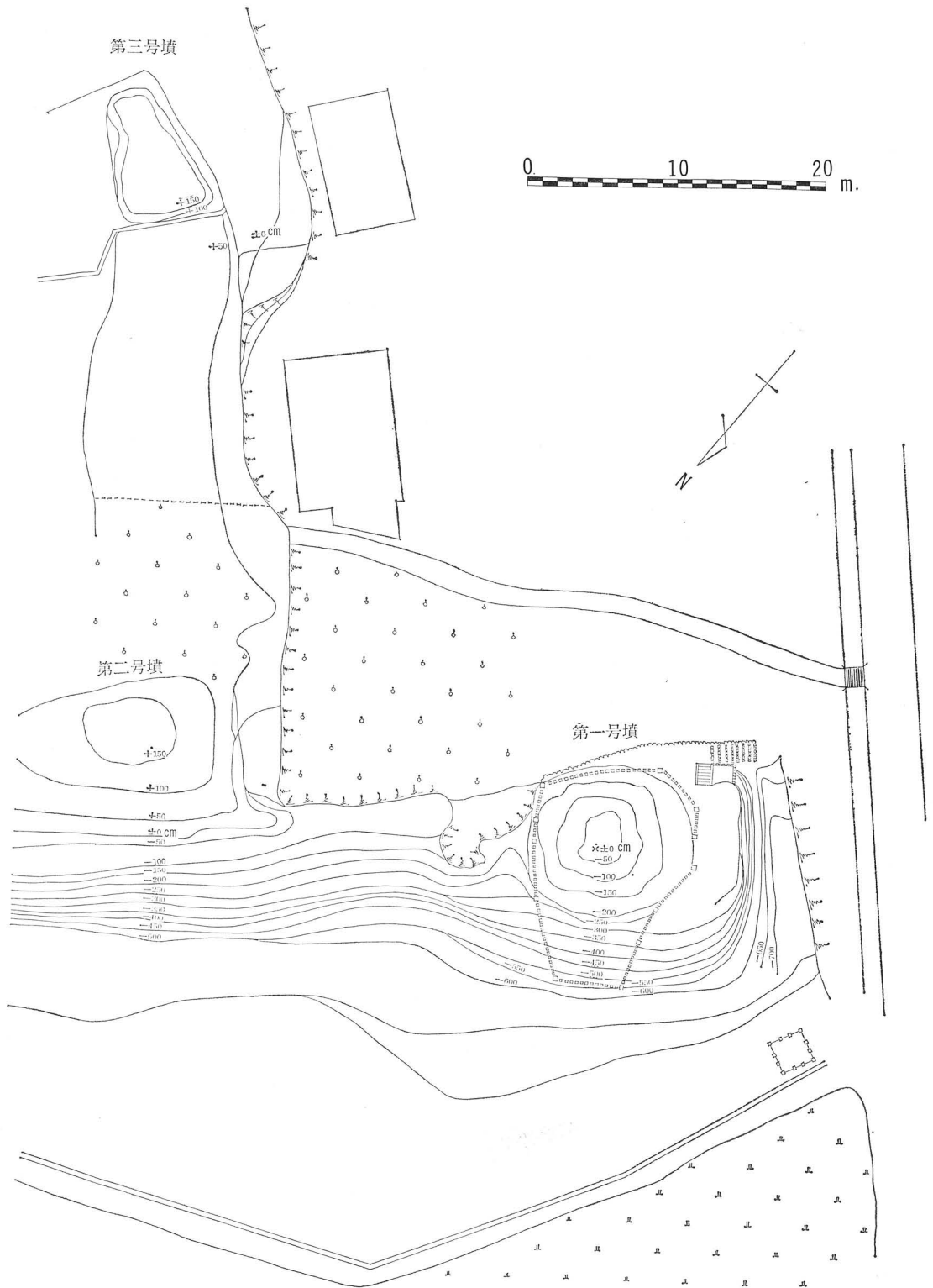
カブト山古墳をはじめ氷上姉子神社を舞台としてヤマトタケルノミコトについての伝説が著名である。ヤマトタケルは熱田神宮の祭神の一人であり、記紀には景行天皇の皇子とされ、宋書に伝えられる倭王武(雄略天皇)の上奏文にみられるように5世紀初頭のころの説話として伝えられている。

記紀のいうところによると、ヤマトタケルノミコトは景行天皇の命をうけ、大和朝廷にまつろわぬ賊を平定するために東国へおもむくのであるが、尾張へ入つたミコトはカブト山古墳から近く、丘陵つづきの氷上邑にある尾張氏の居館に入り、尾張氏の娘ミヤズヒメと晴れて帰還した日には婚(メアイ)するという契りをむすび、さらに東国さして遠征の途についていつたというのである。

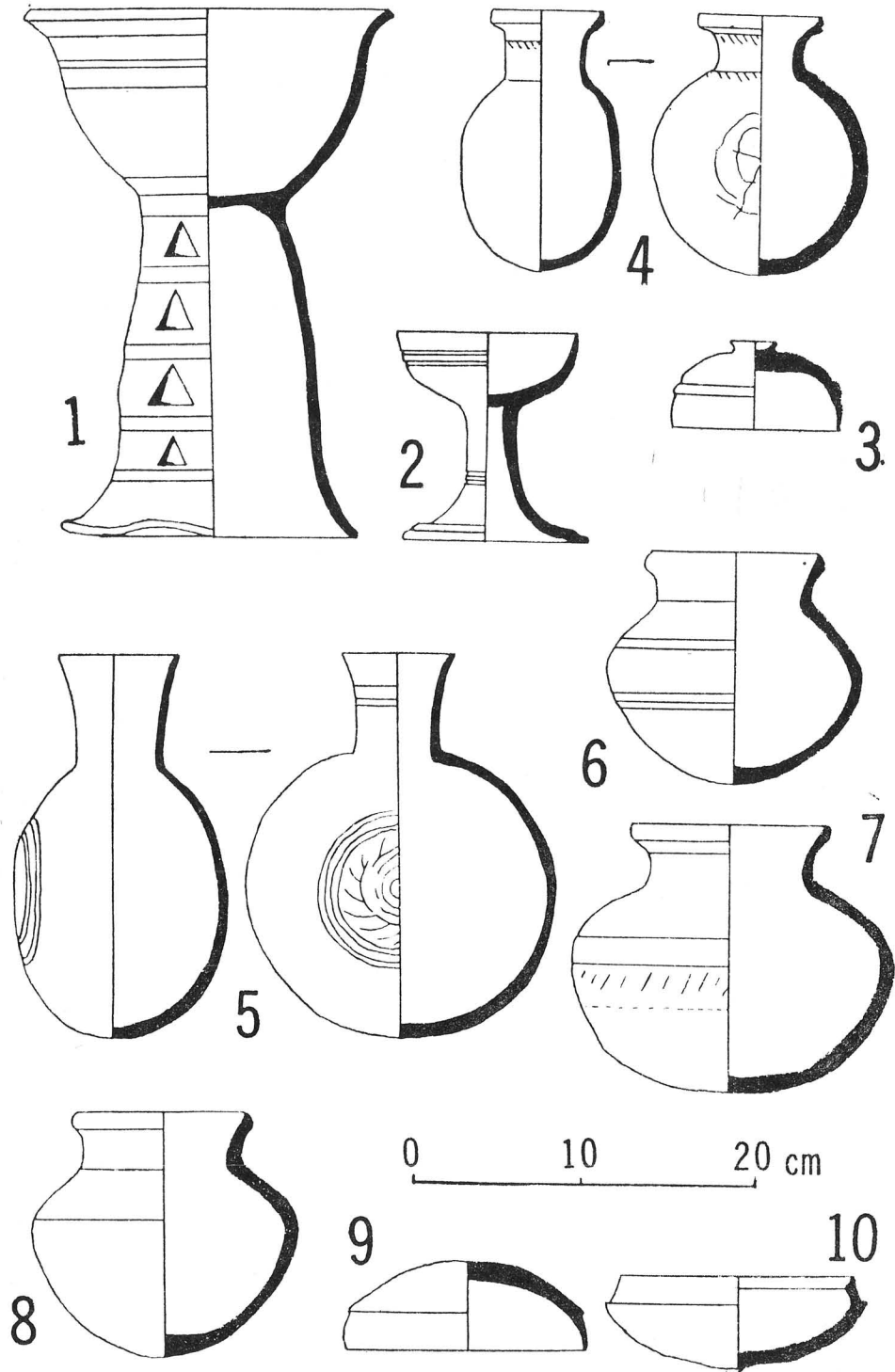
ヤマトタケルが架空の人物であり、伝説上の英雄であるということは、すでに多くの学者によつて説かれていて誰れも異存はあるまい。ヒロインとして彼と契りをむすんだミヤズヒメや、彼とともに東国さして遠征の旅にでていつた建稲種命など、ヤマトタケル伝説の一翼をになつた人々についても、実在の人物ということになると具体的な把握には困難な点が多い。ともあれ大和政権によつて幾たびもおこなわれた東国征服の大事業にあたり、数多い大和の勇者の姿を皇族將軍ヤマトタケルを主人公として形象化した大ロマンの一節として理解すべきものであろう。

尾張における尾張氏の地位は、4世紀から5世紀にかけて名古屋南部から知多半島の在地豪族が、大和政権の支配下に入つて行政される中で、次第に一族の勢力をひろげていつたものである。

名古屋台地の南端に尾張氏と関係の深い熱田神宮が鎮座し、その北につづいて断夫山古墳という



挿図第19 三ツ屋古墳群付近の地形実測図



挿図第20 三ツ屋第1号墳出土の須恵器

尾張地方で最大の前方後円墳をつくっており、周囲にめぐらしているハニワは須恵質のものがみられていて、5世紀の終末か6世紀初頭に年代が比定されている。尾張における尾張氏の政治的地位は、祭祀権とともに5世紀の後半には確立し、すでにそのころ尾張氏の本貫の地は、氷上邑をはなれて名古屋台地の熱田へうつつていたものであろう。

記紀にいう尾張氏の伝承には創作が多い。6世紀中葉のころ尾張氏は継体天皇に妃をおくり、安閑・宣化の両天皇の外戚となり、在地豪族としては破格の栄進をしてからのち、おのが氏族の沿革を古く誇示するために、意図的に創作した部分が多く入っている。ヤマトタケルの伝説についても架空であり、年代も固有名詞も具体性に欠ける点が多いのであるが、ミヤズヒメの兄といわれ、ヤマトタケルの遠征に参加し、長い戦争の旅にたおれ、ついに帰還できなかつたときされる建稲種命など、古代首長の性格の一面を物語るものであろう。

4

三ツ屋古墳の東方にあたり、一段と高い丘が齊山であるが、頂上に近く古墳が指摘されている。現状からは円墳のようであるが、西方につづいて土取りされた部分が方形状に延びていた状態がうかがわれ、前方後円墳であつたと推定されている。もう一つ貴重なことは古墳の周辺から土師質の埴輪が検出されていることである（注6）。知多半島では埴輪をもつた古墳は1基も知られていない。古墳がわずかに存在したことをうかがい知るほどしか遺存していないことは遺憾である。

三ツ屋古墳については、いわゆる後期の群集墳であり、第一号墳から出土した須恵器は尾張地方という第三型式に比定され、年代も6世紀にもとめられている。

カブト山古墳で代表される前期古墳のように、名古屋南部とかアユチ県（アガタ）一円といった広い範囲を統一して、大和朝廷に対しては橋頭保の役目をはたし、事あればみずから支配下の農民をひきいて、大和勢力の先頭に立つという豪族とはことなり、三ツ屋古墳のような後期の群集墳の場合は、古墳周辺の水田地域を支配した地方豪族の墳墓であり、治山治水をはじめ地方の米生産を督励した農業開拓者の姿をうかがうのである。第三号墳をタワケ塚と称しているのも、初期の米作水田を切りひらいた人、すなわち田分（タワケ）を意味したものかも知れない。（注7）

やがて7世紀から8世紀になると、おなじく丘陵つづきの氷上姉子神社の東で、大高小学校の付近から北へ舌状にはりだした台地の上に、古代寺院の大高廃寺が建立されている。平行する4条の沈線がかざられた重弧文の軒平瓦や、中房に圀円をそなえた蓮子を9個もつ16弁の蓮華文軒丸瓦が採集されている。単弁蓮華文軒丸瓦の中房蓮子が圀円をそなえていることや、周縁が重圀であることは白鳳時代の様式であり、さらに重圀に鋸歯文を加えていることは白鳳末期も奈良時代に近いものである。（注8）

（杉崎 章）

注

1. 井関弘太郎・幸島荘八郎「名古屋港付近における沖積層下底面の地形」地理学評論第32巻第9号所収・1959年
2. 井関弘太郎「縄文早期ごろの海面とその相対的变化」名古屋大学文学部研究論集17所収・1957年
3. 増子康真「知多郡大高町齊山の貝塚群」野帳第10冊所収・1962年
4. 池田陸介「東海市名和町の遺跡」東海市文化財調査委員報告書所収・1973年
5. 小栗鉄次郎「上野町名和に於ける古墳」愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第八所収・1930年

6. 前掲「注4」

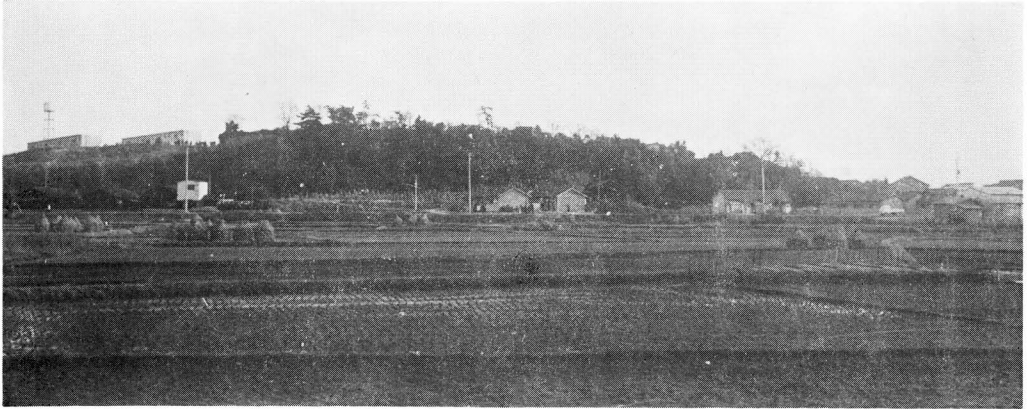
7. 前掲「注5」

大矢利久・加古栄・森本良三・坂野一幸「名和古墳群随考」知多郡上野中学校・1954年

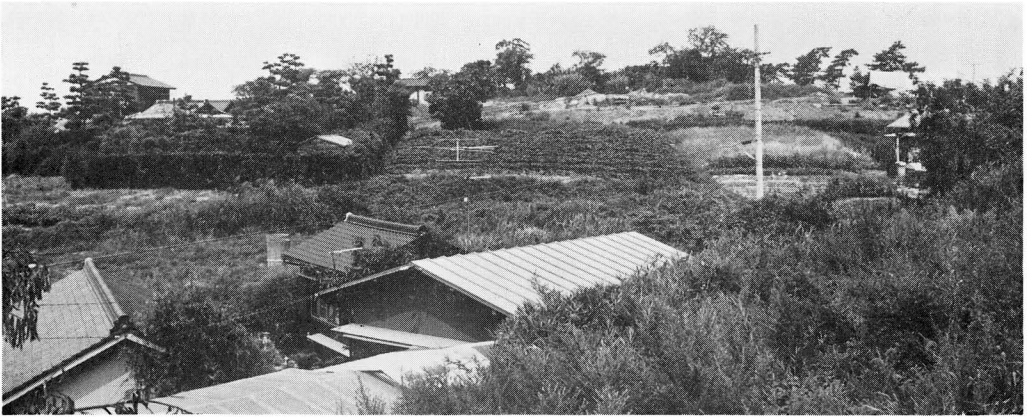
杉崎章「愛知県知多郡上野町三ツ屋古墳の子持勾玉について」考古学雑誌42の3所収・1954年

8. 芳賀陽「尾張国知多郡大高町発見の古瓦について」野帳第7冊所収・1958年

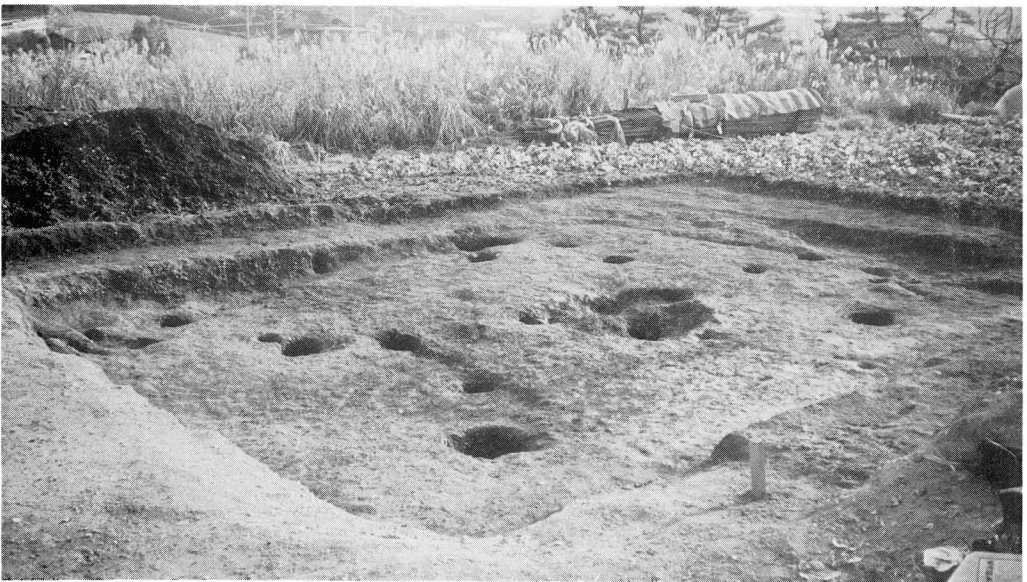
図版第1



1. カプト山古墳の遠望（昭和45年2月）



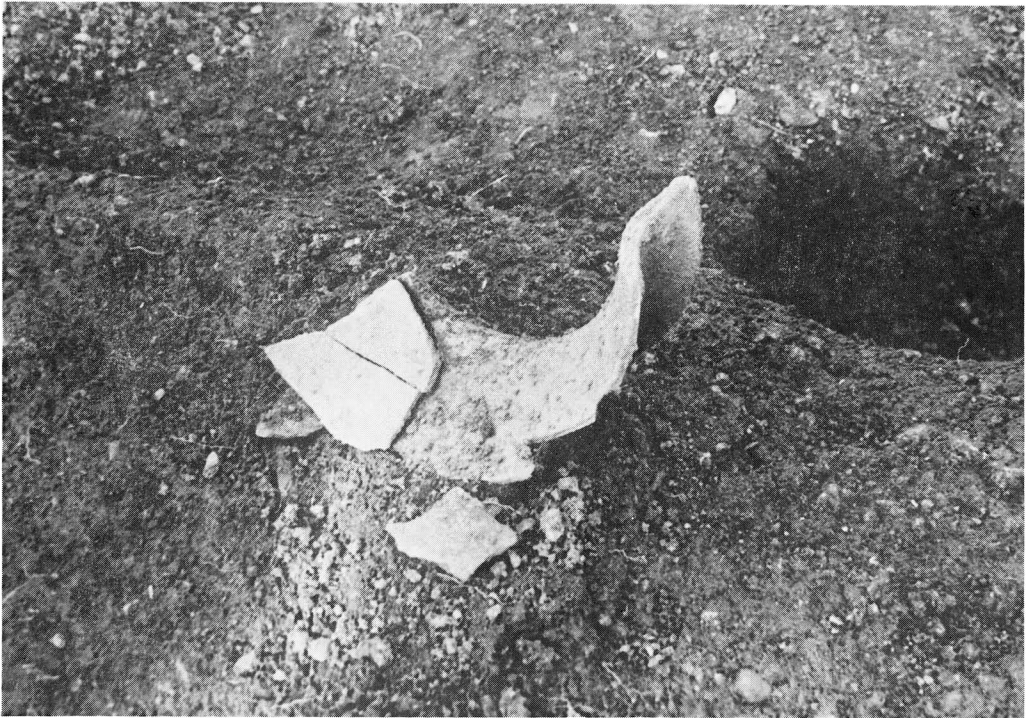
2. カプト遺跡の調査状況



3. 第2号住居址の全景



1. 第3号住居址の柱穴群



2. 第3号住居址の遺物出土状況

図版第3



1. 第2調査区（手前より第6・第5・第4号住居址）



2. 第6号住居址の入口遺構

図版第4



1. 第3調査区(手前は第7号住居址)



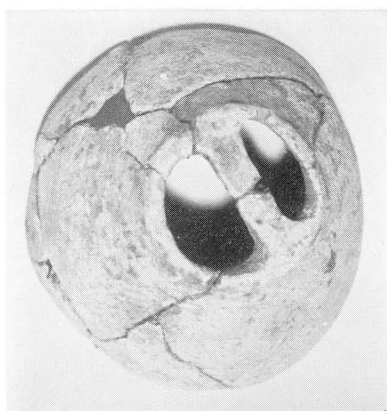
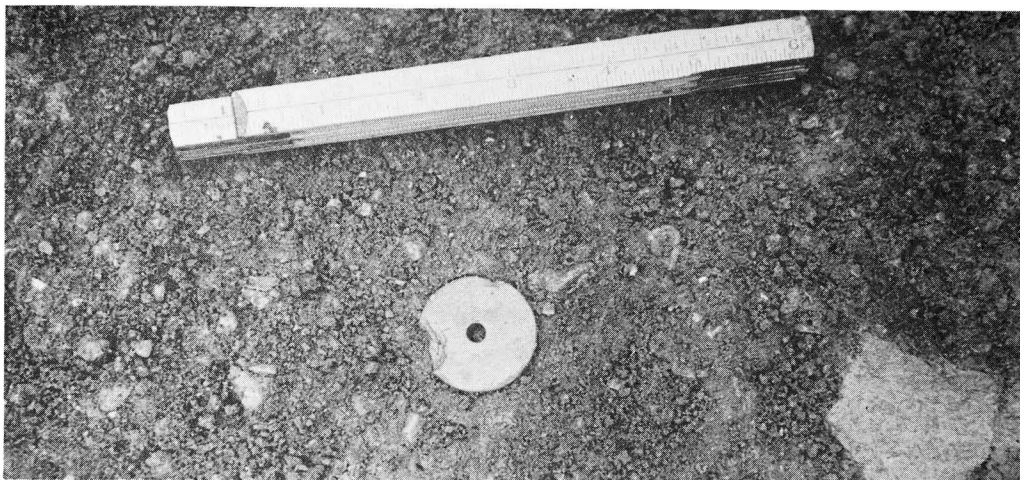
2. 第7号住居址の全景



1. 第7号住居址の遺物出土状況



2. 第8号住居址の炉址



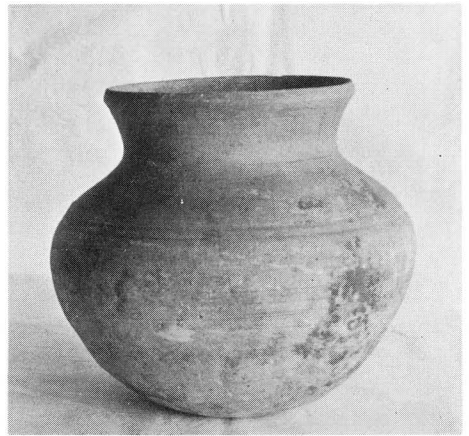
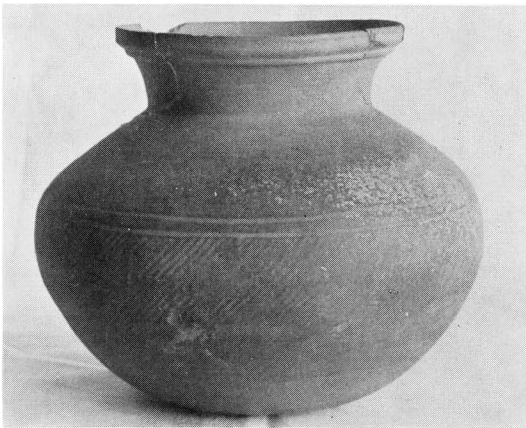
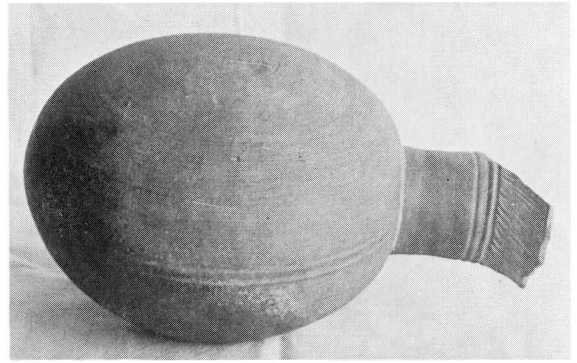
上 石製紡錘車出土状況
中 甌の出土状況（西方柱穴群）
下（甌上掲図版）の底部

図版第 7

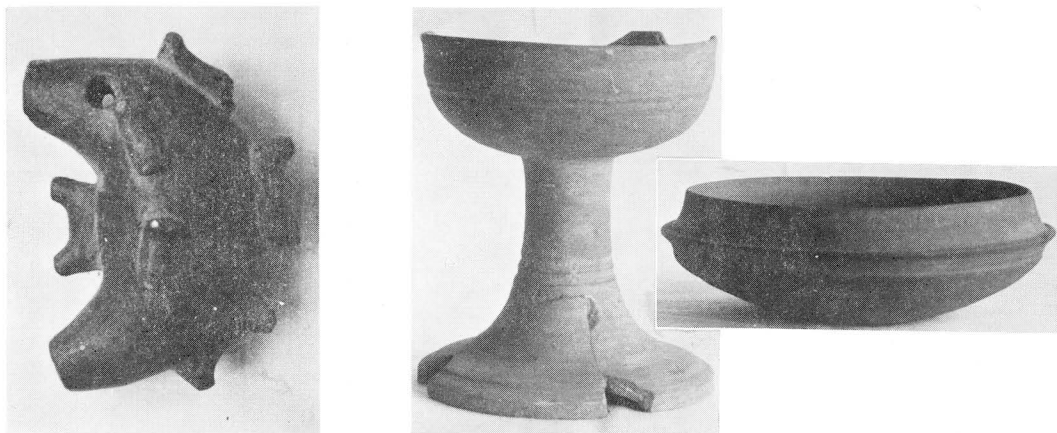


上 カプト古墳出土の石製模造品
(左より罎・合子・器台)

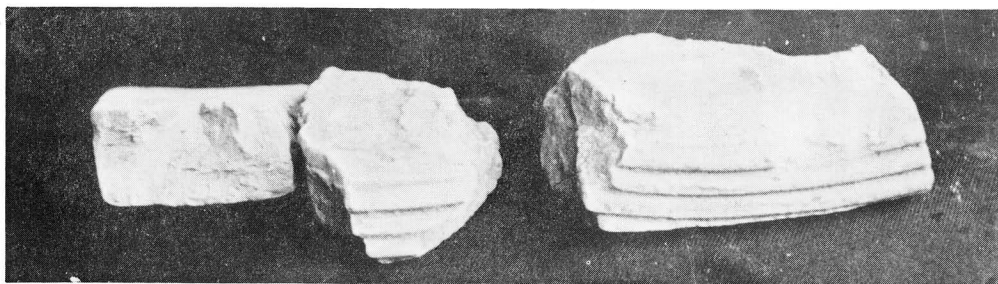
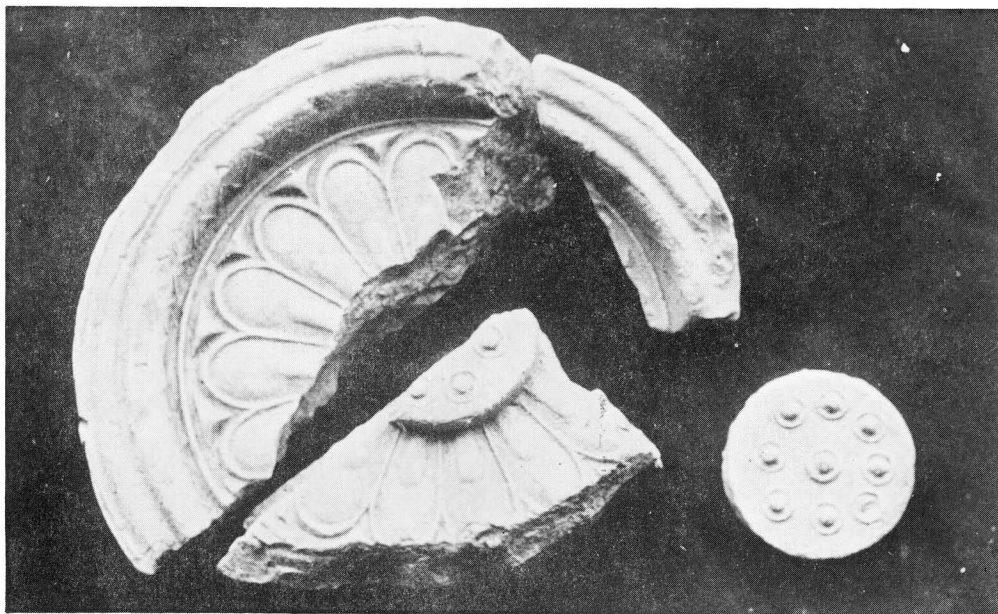
中・下 三ツ屋第1号墳出土の須恵器
(器台・提瓶・罎)



図版第 8



上 三ツ屋第1号墳出土の遺物 (左・墳丘下の溝からでた子持勾玉 中・高坏 右・坏身)



中・下 大高廃寺出土の蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦

昭和49年2月15日 印刷
昭和49年2月28日 発行

〔非売品〕

東海市カブト山遺跡

—第二次調査報告—

編集発行

東浦市高横須賀町狐塚11番地

東海市教育委員会

印刷所

半田市板山町14の65

ツ シ 印 刷 所

